

---

# フリーゲル

來澄 和樹

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】  
フリーゲル

【Nコード】  
N6591K

【作者名】  
來澄 和樹

【あらすじ】  
殺したいほど憎んでいる相手がいますか？復讐したい人がいますか？恨みを晴らしたいですか？

それならば我々にお任せを

怪我をさせることも、不幸にさせることも、殺すことも出来ます。但し、代償を支払う覚悟のある方のみとさせて頂きます

呪い代行人「フリーゲル」

フォルテピアノともリンクしている、ファンタジーオカルトラブス  
トリー

## 序章

夢を忘れた街

生きる意味を探し、迷い悩む愚か者

嘘を並べる偽善者

他人を同情する自分に酔う利己主義者

知恵を働かせ、言葉巧みに己の利益を追求する者

騙され、人を憎み呪う放浪者

関係ないと思い込む、自己愛者

人それぞれとはよく言ったもの

様々な、人間の形をした醜い彼らは今日もそこにいる

誰が笑い、誰が泣こうが、気付かない

己と大切な人だけを守りながら、知らず知らず誰かを傷つけていく

生きている限り、汚れていく手のひら

自分達人間が全ての頂点に立ち、世界を知ったかのような傲慢さ

この世界は混沌し、生きにくい

普通に、楽しく生きたいだけなのに

## 呪いの連鎖

殺したいほど憎んでいる相手がいますか？復讐したい人がいますか？恨みを晴らしたいですか？

それならば我々にお任せを

怪我をさせることも、不幸にさせることも、殺すことも出来ます。但し、代償を支払う覚悟のある方のみとさせて頂きます

呪い代行人「フリーユーゲル」

世間でタロットや占いが流行っていた頃、とある店が街角にあった。いつからそこにあったのか、誰も知らない。ずっと昔か、それとも最近か……気付けば店はそこにあった

その店でバイトをしている私は、今日も学校が終わると真っ直ぐ店に向かった。表向きは普通の雑貨店。だが、それは知る人ぞ知る呪い代行店「フリーユーゲル」の建物

私、ミラはそこで雑貨店の店員をしながら、説明係兼サポート役として働いている、怪好きの高校二年生。彼氏募集中の占い師見習いである

着いたら雑貨店の入り口から入り、奥の部屋へ。すると、ソファーやデスクのあるオフィスがある。そこには、いつも店長がいるのだ

「ミラちゃん、今日も可愛いわねー！でもー、やっぱり服はもう少し可愛くないとー」

「ゴスロリは嫌ですよ、店長」

フリーゲルの店長、金髪ブリッコ、ロリータファッション美人だ。名前、年齢等々謎に包まれた女性である。何でも、神社出身で陰陽師の子孫らしい。霊力が高く、夢で未来が見える能力を持っている

聞いた話では、時折いなくなるのは実はもう一つ店を持っていて、そっちに行っているかららしい。怪奇現象を請け負う店らしいのだが……一回行ってみたいものだ

「そういえば、雑貨店の方レド先輩しかいませんでしたけど」

「いいのよ、どうせこの時間は暇なんだし。それに今日はミラちゃんには本業があるんだから」

「あ、はい。じゃあ依頼者のとこ行って来ます」

「宜しくねー」

データを受け取り店を出て、依頼者との待ち合わせ場所に向かう

依頼方法は、依頼者がフリーゲルのサイトを探し、アクセスする。そこで依頼内容や情報を入力してもらうのだ

その後、説明係である私が意志確認を行い、店へ案内する

依頼が店長によって受理されれば、魔術士である仲間に依頼は遂行される

「えっと……この辺かな？」

店からさほど離れていない公園が今回の待ち合わせ場所。相手は高校一年生。私とは違う高校らしい

「んーと？怪我の依頼か。何々？」

待ち合わせ時間より早く着いてしまった私は、ケータイに送ってもらった依頼者のデータを見ていた

「骨折？ふんふん……陸上かぁ。イジメねえ」

「あの……」

「ん？」

声を掛けられ振り向くと、黒髪眼鏡の真面目そうな普通の男子高校生が立っていた

「もしかして、フリーゲルの……」

「はい。貴方が依頼者の響くん？」

「そうです」

見るからにイジメられっ子ね……目を合わせないし。失礼だなー

「早速だけど、依頼の確認ね……陸上部期待の一年生、常盤鍵ときわけんの片足骨折。理由は彼がイジメのチームのリーダーだから。オッケー？」

「はい」

「じゃあ宣誓して」

「え？」

私は仕事モードに入った。空気が変わる

前にレド先輩に聞いたら、この時の私は酷く暗く怖く恐い顔をして、有無を言わず戦慄させ、しかし無表情に相手を見据えているのだそうだ

どんな顔だよ！ってカンジ

「宣誓して……同等の代償を払い、呪いが帰り、身を滅ぼそうとも、構わないと。人を呪わば穴二つ……わかるよね？」

「代償って……？」

「その足よ。貴方の足。骨折なら、その足も骨折」

「え……」

響くんは愕然として座り込んだ

「足は……だって僕は……」

「陸上部だからやめてって？」

「え?!」

「何で知ってる? って顔ね。黒打響<sup>くろうちやう</sup>、十六歳。両親と姉との四人家族。陸上部で成績優秀、学年三位。学年四位のリーダーから目を付けられ、イジメられる……」

いるよねー、いつも寝てるくせに成績良いヤツ

「僕は……」

「どうする? 依頼」

につこり笑って言ってやった。彼は迷いながら、それでもお願いしますと言った

そんな勇気があるなら、他で使えばいいのに

そんなことを思いながらも、これは仕事。私は彼と一緒に店へ向かった

「お帰り、ミラちゃん。依頼人、ちゃんと連れてきたわね？」

「はい。宣誓は済ませました」

店のオフィスのソファー。響くんと並んで座り、店長の指示を仰ぐ

「ん。じゃあ私からの話ね」

そう言って店長は、前のイスに座った

「響くん。初めまして、私がフリーゲルの店長です。早速だけど、話をするわね」

「あ、はい」

「依頼はイジメのリーダー、常盤鍵くんの右足の骨折。理由はイジメられているから。代償は響くんの右足骨折。これは聞いてるわよね」

「はい」

「依頼費も大丈夫？」

「あ、はい。サイトに書いてあった額ですよ。大丈夫です」

「そう。支払いは後払い。現金でも振込みでも構わないわ。写真、持って来てくれた？」

「あ、はい」

響くんから一枚の写真を受け取る店長。そこには、常盤鍵と思われる少年が写っていた

「じゃあ後は約束だね。ミラちゃん」

呼ばれ、私は響くんに向き直った

「呪ったことを誰にも言わないこと。依頼内容や依頼費については、遂行後に抗議も何もしないこと。遂行後は何があるうと、私達は責任を負わない。呪いを軽んじないこと。呪いを忘れないこと。呪いは無かったことには出来ないからね。これを守ると約束して下さい」

「わかりました」

私と店長は頷き合う

「それでは依頼を受理します。担当の者を呼ぶから、ちょっと待っててね」

そう言つと、店長はオフィスの奥へと消えた。そこは、仲間である魔術士の部屋になっている

「あのさ」

私は店長が消えたドアを見ながら口を開いた

「良いの？陸上部なのに骨折なんて」

「え、あ、はい。アイツが、常盤くんが走れなくなれば、それで……」

でもそれじゃアイジメは変わらず続くじゃん。そう思った言葉は飲み込んで、違うことを口にした

「……でもさ、勇気と無謀を履き違えちゃダメだよ？」

「はあ……」

ガチャリとドアが開く。店長の隣には、呪いを扱える魔術士のラ  
ラがいた

店長の親戚らしい彼女は、見た目は小学生。だけど、名前と性別  
以外は店長同様謎に包まれた、占い師の不思議な女の子である。あ  
まり口数は多くなく、いつも黒い服を着ている。良い事を口にする  
ことは、幸運を逃がすという忌み言葉の考えから、故意に悪い言い  
回しをする

「ララ、彼が依頼者よ。黒打響くん」

私達の前に立つララ。響くんを無表情に見つめている

「これが呪う相手よ。常盤鍵くん」

店長が響くんから借りていた、相手の写真をララに見せる

「右足骨折依頼よ。宜しくね」

頷いたララは、もう一度響くんを見つめた

暫くじつと見た後、奥の部屋へ向かうララ。私達も、後について  
いった

「響くんは、その黒いイスに座って。うん、真ん中にある一人用  
のイス」

部屋はいかにもな、怪しげな雰囲気漂っている。魔術用道具が

並び、黒いカーテンで窓は閉じられ、明かりは蝋燭と隙間から漏れる日光のみ。依頼者が座る黒いイスの真下の床には、魔方陣が描かれている

響くんが言われた通りにイスに座った

ララが彼の前に立つ

「始まるわよ」

わくわくした店長の声。私は無言で壁際に立っていた

「汝、名を」

ララが喋った。小さいけれど、澄んでいて心地よく耳に届く声

「く、黒打、響……」

「汝、もう同じ心、姿では二度と戻らぬこと……覚悟は良いな？」

「……………はい」

ララの迫力に気圧されたのか、響くんがたどたどしく返事する

「そうか……………ならば、致し方あるまい」

そうボソツと呟いたかと思うと、ララは空中に何かを書き出した。それは、床に描かれた魔方陣を発動させる魔法の始まりだった

「憎い相手を思い浮かべて、目を閉じよ」

響くんが言われた通りにする。と、部屋の空気が変わった

ひとりでに蝋燭が消え、いつの間にか日光も全て遮断され、室内は闇に包まれた。聞こえていた街の喧騒も、何もかも聞こえない。

ここは、今やオフィスの奥の部屋であって、違う世界でもあるのだ

魔方阵が光り出す。ララと響くんが見えた。ララの指が空を踊る。そこには、キラキラと光るものが舞っていた。蝶だ。光る蝶が次から次へと姿を現し、やがてそれは響くんの右足へと集まっていた

私はもう、何十回と見てきた。いつもと変わらない、魔法の光景。最初は信じられなかった。魔法が存在するなんて。でも、これは魔法以外の何物でも無かった

そして、この後に何が起こるかも当然知っている

「っ……！」

蝶が消えた瞬間、軽快でいて、しかし室内に響く音が鳴り、彼の呻き声がこだました

今頃、写真の相手、常盤鍵という少年も階段から落ちるなり何なりして、彼と同じように痛みを感じているのだろう

私には、想像でしかないのだけれど

響くんに応急処置を施し、タクシーを呼んだ。それに乗り、響く

んは病院へと向かう

私はオフィスにいた。ララも珍しく部屋から出てきていた

「タロット？師匠、タロットもするんだ？」

こくと頷いたララ。占いの師匠でもある彼女は、年下とはいえ尊敬に値する人間。私は彼女を師匠と呼んでいる

「師匠、何を占ってるの？」

「さっきの少年」

あー、響くんの未来か何かかな

「ふーん」

タロットなら私も持っている。大アルカナカードしか持っていないし説明書片手にしかまだ出来ないけど

「あれ？師匠も大アルカナカードだけ？」

「今、ない」

無いつて……じゃあこれは単なる興味で遊んでるだけか。本気じゃないのか

いや、師匠はいつだって本気が

「師匠なら、それだけで十分だもんね」

テーブルに置かれたカードがオープンされる。そこには、塔、死神、運命の輪があった

嫌でも目を引く三枚が、私から言葉を奪った

黙ったままララを見つめる。ララはカードを暫く見つめた後、私を見て、何でもなかったかのようにカードを片付けてしまった

「師匠？」

「死神、終わりだけではないことは知っているのだろう？ならば気にするな」

「それは、そうだけど……」

運命の輪だつて悪い意味って訳じゃないし、でも塔はな……

「今日が終われば、またあの少年は姿を現す。考えても栓ないぞ」

「明日、か。わかったよ、師匠」

考えたところで今の私には何も出来はしないのだ。未来は生きていれば勝手に向こうからやってくるんだから

「おはようございます」

「おはよう、ミラちゃん。今日も可愛いわねー。でももうちょっと

可愛い服着なきや」

「ゴスロリは嫌ですよ、店長」

毎度の会話を交わし、私はオフィスのソファ―に座る。今日は土曜日。学校は休みだから、朝から仕事だ。それに、昨日の依頼が気になる

気になるのは、タロットのせいもあるんだけど

「店長、依頼は来てます？」

「新しいのは、まだ来てないわよ。でも仕事は来るから、このまま待つてましょ」

「それは予知夢？」

「まあね」

意味ありげな笑み……予知だって最初は信じられなかったけど、演技や適当なこと言ってるようには見えないし。ハズれたことはないしね。大体そういうオカルトとか好きだし

「店長、客連れてきたぜ。じゃあオレは店に戻るから」

「サンキュー、レドくん。いらっしやい、響くん」

「あ、どうも」

雑貨店の方にいたレド先輩に連れられてやって来た響くん。松葉

杖を使って移動している

「あの、お金……」

「はいはい。はい、確かに頂きました」

「あのさ、鍵くんには会った？」

「いえ、まだ。たぶん月曜日までは会わないと思います」

ま、そりゃそうか

「黒打響……」

いつの間に出てきたのか、ララがオフィスにいた。私も驚く

「ララ、いつからそこに……」

「黒打響、嘘は滅びを招くぞ」

私の言葉を見殺して、ララは響くんに向き合う。でも嘘ってどう  
いうこと？

「会っていないとは、よく言ったものだ」

やんわりと上げられた口角。顎を引いた上目遣い。鋭い光を帯び  
た瞳。やや前髪で影が出来る顔。それは久し振りに見た、ララの楽  
しそうな表情だった

しかしそれは凍り付きそうな、それでいて引き付けられるような

表情でもあった

「会っていないことが、嘘？」

私は響くんを見た。店長は、楽しそうに不適に笑っている

「会ったの？」

「あ、いや……会ってなんか……」

「響くん、ララの前で嘔吐かない方が良好いよ。意味ないし」

私の言葉にうつと詰まり、視線を彷徨わせる響くん。やっぱり会ってたんだ

「病院で、見かけただけです……向こうは気付いてなかったですし。イラついて、当たり前散らしてたのが、良好気味でしたけど」

「何で嘘なんか……」

「目の前を通ってやったのに、アイツ気付きもしないで……！ム力つくから話したくなかったんですよ」

何か……キャラ変わってない？呪ったことで、変に強気になってるけど……良好変化じゃないなーこれ

「それじゃあ、これで失礼します」

そう言って響くんは行ってしまった。以前のウジウジさは無くなって良かったかもしれないが、一見陰湿そうな暗さが増したような

気がするな……

「嘘は、滅びを招く……嘘は、塔に繋がる」

ブツブツ言いながらララは奥の部屋へ向かった。こっちも怖……

「嘘は、塔に……か」

どんな予言だろ……

私には、知る由もなかった

その日の夕方

「ミラちゃん、依頼入ったから行っ来て」

雑貨店の方で店番をしていた私の元に、店長がやってきた

「今からですか？」

「今からよ」

外を見やれば、もう日が短い時期。かなり暗くなってきた

「うー……はい」

渋々頷き、データを受け取る。店番は店長がするのか？なんて思いながら、店を出た

歩きながらデータを見る。そこに書かれた名前に、声を上げそうになった

「げー……」

渋々、待ち合わせ場所の公園へ向かう。と、依頼者はもう来ていた

「どうも、フリーユージェルです」

「あんたが？」

ああ、確認するまでもない。写真のままの少年だ

「はい。貴方が依頼者の鍵くんですね」

「そうだけど」

見るからにイジメっ子ね……自信のある態度、鋭い瞳、不機嫌そうな表情、流行りの服を流行りの着こなして着てる……顔は良いけど、タイプじゃないなー

「早速だけど、依頼の確認ね……クラスメイト、黒打響の消失依頼。間違いはないよね？」

「ああ」

「じゃあ宣誓して」

「あ？」

私は仕事モードに入った。鍵くんが息を呑むのが伝わってくる

「宣誓して……同等の代償を払い、呪いが帰り、身を滅ぼそうとも構わないと。人を呪わば穴二つ……わかるよね？」

「……っ、わ……わかったわかった。何でも良いからさっさとやってくれよ。あの野郎が消えてくれるなら何でもするからよ。金ならあるし」

一瞬怯んだのか、早口に捲し立てる鍵くん。でも、重要なことに気付いてない？

「……話はちゃんと聞いた方がいっせえな！何でもするつつつてんだろぅが！さっさとあの野郎を消してくれよ！アイツなんだろ？！この足折れて呪ったの。ム力つく……クズのくせに、呪いだあ？！ふざけんなよ……消してやる。一生彷徨いやがれ」

凄い勢いで喋りやがって……

「その足が何で呪いだと？」

「は？このオレが転んだだけで骨折するわけねーだろ。んなことすんの、あの野郎しかいねーしな」

変なこじつけだけど、合ってる……

「だから早く」わかりました。それでは店へご案内致します」

後は店長に任せちゃえ

私は彼を店に案内した

「ただ今戻りましたー」

「お帰りー、ミラちゃん。連れてきたわね、常盤鍵くん」

「はい。一応、宣誓済ませてます。たぶん話聞いてないだろうけど」  
店に着くと、雑貨店にはレド先輩がいた。そのまま通り過ぎ、オ  
フィスに入ると店長が出迎えてくれた

私の話を聞き、でしょうねといつもの笑みを浮かべた店長は、鍵  
くんをソファーに促した

「初めまして、私がフリーユージュルの店長です。早速だけど、話をす  
るわね」

「はあ……」

「依頼はクラスメイト、黒打響くんの消失。理由は呪い返し。代償  
は聞いているわよね？」

「ああ。あの野郎が消えるなら、何でもするからよ。さっさと消し  
てくれよ」

鍵くん、少しイライラしてきてるな……

「依頼費も大丈夫？」

「金ならいくらでもあるよ」

「そう。支払いは前払い。現金で今払ってくれるかしら。勿論、依頼を失敗した場合は全額お返しします。それと写真、持って来てくれた？」

「ほらよ」

鍵くんは、封筒をテーブルに投げて寄越した。中にはお金と響くんが写った写真。お金投げるなんて、何考えてんのこいつ！

「じゃあ後は約束だけね。ミラちゃん」

呼ばれ、私は鍵くんに向き直った

「呪ったことを誰にも言わないこと。依頼内容や依頼費については、遂行後に抗議も何もしないこと。遂行後は何があるうと、私達は責任を負わない。呪いを軽んじないこと。呪いを忘れないこと。呪いは無かったことには出来ないからね。これを守ると約束して下さい」

「何でも良いから早くしてくれよ。一々めんどくせえな！」

キレそうになるのを抑え、私は店長を見た

「それでは依頼を受理します。担当の者を呼ぶから、ちょっと待っててね」

そう言うと、店長はオフィスの奥へと消えた。ララを呼びに行っ

ただ

こいつは代償が何か、絶対わかってない。教えてなんかやるもんか。忠告はしたもんね。聞かないこいつが悪い！

考えているうちに、ララと店長がオフィスに現れた。ララは鍵くんを見ても、まるで何もかも知っていたかのように、表情を全く変えなかった

「ララ、彼が依頼者よ。常盤鍵くん」

私達の前に立つララ。鍵くんを無表情に見つめている

「これが呪う相手よ。黒打響くん」

店長が写真をララに見せる

「消失依頼よ。宜しくね、ララ」

頷いたララは、もう一度鍵くんを見つめた

暫くじつと見た後、奥の部屋へ向かうララ。店長と鍵くんが、後をついていった

私は一人、オフィスに残る。消失や殺人依頼の時は、絶対にあの部屋に私は入らない

一度…… たった一度、目の前のあの黒いイスに座った人間が、蝶に包まれ消えたのを見てから、私は二度と見ないようにしている

怖いとか、嫌だとか……そんなんじゃない。別にオカルトやホラーは苦手じゃないし、寧ろ好きだ。だけど、あの時の言いようの無い感覚……虚しいような、何かが終わってしまったような、物悲しくも不思議な思いは、私から暫くの間、笑みを奪っていった

だから……私はもう見ない

オフィスのソファーに身を沈める。目を閉じた。昨日のタロットが思い浮かぶ。塔は崩壊し、死神が現れ、運命の輪は廻り始めた

彼は、消えてしまっただろう。そして、あの彼も

ガチャリと奥の部屋のドアが開いた。出てきたのは、ララと店長の二人だけだった

私はソファーにちゃんと座る。ララが隣に座った

「師匠、あの二人は過去から縁が深かったのかな？同じ時代に生まれ、出会い、呪いあい、一緒に消えた……」

「輪廻を共にした、宿業深き因縁を持った二人だ」

「ふーん……鍵くん、自分も消えるってわかってなかったんだ。今頃、何考えてるかな？……私達を恨んでるかな？」

ララは私にタロットの愚者のカードを見せてきた

「自業自得、自縄自縛。考えても栓ないぞ」

「うん……」

愚者……か

私は窓から空を眺めた。星が輝いている

ララが部屋へ戻った。そういえば、いつもより口数多かったな

「ミラちゃん、どうしたの？」

「え？あ、ああ……いや、星が綺麗だなーって見てただけですよ」

「そう……そろそろレドくんも帰る時間だし、ミラちゃんも気を付けてね」

「はい。お疲れ様でしたー」

「ん、ご苦労様。また明日ね」

上着を着て、店を出た。すっかり夜は冷えてきたなあ

そんなことを思いながら、自転車に乗り家へと向かった

「ただいまー」

「お帰り、ミラ」

「あれ？お姉ちゃん、帰ってるの？珍しいー」

「今日は早くレコーディングが終わったの」

家に帰ると、歌手でもある姉がいた。いつも仕事でいないから、今日は珍しいなあ

「まだ顔出ししないの？もう言いたくて言いたくて、ウズウズしてんだけど」

「だからミラに言うの嫌だったのに……まだまだしないよ」

「ちえっ……」

姉は、一切プロフィールも顔も出したことの無い歌手だ。本当に歌と自作の歌詞だけで売っている、今有名な歌手である

そのせいか、時折悪いこと雑誌に書かれてたりするけど、お姉ちゃんは今全然気にしてない。それに、CDは凄く売れてるし今や知らない人はいないって言うていいくらい、人気の実力派だ。そんな歌手の妹なのに、誰にも何も内緒なんて……拷問だよー

「そういえば、ミラって雑貨店のバイトだったけ？」

「ん？うん」

呪いのことは秘密。家族にも、友達にも内緒

「雑貨店、ね……」

「何？」

「いや、何でも。知り合いが雑貨店やってるって言ってたから」

「ふーん……」

「さ、ご飯食べよ」

「あーい」

私は、姉の言葉を大して気にもせず流してしまった。姉が、私同様隠し事をしているなんて露にも思わないで

もうすぐ今日が終わる。私はベッドの上で転がっていた

枕の下から一冊の小さいノートを出す。私の秘密日記だ

「今日は、と……」

黒打響くん、常盤鍵くん。消失について……

私はペンを止めた。前々から段々と抱き始めた気持ち。これは、戸惑い？恐れ？不信？

「良いのかな……これで。このままで……」

呪いを代行することは、正しいだろうか？

「はあー……」

私はノートを閉じた。枕下へ戻す

「知らん、そんなことは……」

綺麗事も、道徳も、常識も、並べたくなんかない……また、笑みを奪われる

今一人で考えたって仕方ない

私は明かりを消し、目を閉じた

人生は一箱のマツチに似ている。重大に扱うのは馬鹿馬鹿しい。重大に扱わねば危険である——芥川龍之介

## 呪い否定論

殺したいほど憎んでいる相手がいますか？復讐したい人がいますか？恨みを晴らしたいですか？

それならば我々にお任せを

怪我をさせることも、不幸にさせることも、殺すことも出来ます。但し、代償を支払う覚悟のある方のみとさせて頂きます

呪い代行人「フリーユージェル」

今日は雨。朝から降っていて、風も強いし、気温も下がってかなり寒い。この時期の雨は気温をぐっと下げちゃう。……もっと着込んでくれば良かった！なんて思いながら、かじかむ手に痛みさえ覚えつつも、自転車を走らせ店に向かった

「うー……寒うー」

「やっだー、ミラちゃん！そのカップ可愛くない！」

「自転車ですもん、仕方ないじゃないですか」

制服濡らすと面倒だし、傘は危ないし

私はハンガーにカップや制服の上着をかけ、ついこの間まで扇風機の置かれていた場所へ向かう。そこには、今はヒーターが置いて

あるのだ

「暖かい、幸せー」

「幸せなどこ悪いけど、ちょっと仕事してきて。はい、資料」

「げ……」

「ほら、早く」

「うー……」

店長に背中を押され、上着とデータを受け取った私は店を出る。溜息を吐き、渋々私は依頼者との待ち合わせ場所に向かった

傘を片手にケータイを開く。勿論道路に注意しながら、送ってもらったデータを見た

「えっと……窓際が一番端……この席か」

店からさほど離れていない喫茶店が今回の待ち合わせ場所。相手は高校二年生。なんと、私と同じ高校だ。でも知らない人だな

「んーと？殺人依頼か。何々？」

まだ依頼者は来ていないようだ。私は待っている間、依頼者のデータを見ていた

「ストーカー？ふんふん……彼女が……怪我をね……」

「あの……」

「ん？」

声を掛けられ振り向くと、黒髪の普通の男子高校生が立っていた  
なかなか格好良いんじゃない？

「フリーゲルの人ですか？あれ、うちの制服？」

「はい。貴方が依頼者の弾くん<sup>だん</sup>？」

「はい。弦白弾<sup>つるしろ</sup>です。まさかあのフリーゲルに高校生がいたなんてな……しかもこんな身近に」

「ま、バイトの下っぱなんだけどね」

格好良いんだけど、さつきから悲しそうな淡い苦笑ばかりして……  
彼女のことが頭にいっぱいなんだろうな

「早速だけど、依頼の確認ね……彼女の悩みの種であるストーカー、  
声鳴<sup>こわなる</sup>楽の殺害。理由は彼が彼女を傷つけたから。オッケー？」

「はい」

「じゃあ宣誓して」

「え？」

私は仕事モードに入った。空気が変わる

「宣誓して……同等の代償を払い、呪いが帰り、身を滅ぼそうとも、構わないと。人を呪わば穴二つ……わかるよね？」

「代償って？」

「その命よ。貴方の命。殺害なら、貴方も殺害」

「え……代償って、奪いたいものを差し出すって事？」

「そうよ」

弾くんは驚いていたけど、覚悟を決めたみたい。瞳の光が強くな  
った

「わかった。この命、差し出すよ」

「良いの？それじゃあ彼女に二度と会えなくなるよ。彼女の為にス  
トーカーを殺したいんでしょ？」

「ずっと、耐えてきたんだ。でも警察は注意くらいしか出来ないし、  
警察が関わるとヤツは行動をより陰湿に、過激にしていた。もう、  
彼女は耐えられない。警察は役に立たない。そんな時、とうとう彼  
女はヤツに傷を負わされた。もう我慢出来ない……ヤツを確実に殺  
せるなら、構わない！」

「そう……」

気持ち、わからなくはないけど……うん、やっぱわかんない

「彼女にこのことは何か言っただけなの？」

「彼女には全く……悲しませるんだろ？」

「……………」

「友達で一人、ストーカーのことで相談してたやつがいて……前に冗談でフリーゲルに依頼しようかと言って言ったことはあるけど……」

感付くかも……しれないな、その人

ま、そんなの今までもあったし。大丈夫かな

そんなことを思いながらも宣誓の再確認をし、私は彼と一緒に店へ向かった

「お帰り、ミラちゃん。依頼人、ちゃんと連れてきたわね？」

「はい。宣誓は済ませました」

店のオフィスのソファへ。弾くんと並んで座り、店長の指示を仰ぐ

「ん。じゃあ私からの話ね」

そう言って店長は、前のイスに座った

「弾くん。初めまして、私がフリーゲルの店長です。早速だけど、

話をするわね」

「あ、はい」

「依頼はストーカー、声鳴楽の殺害。理由は彼女が傷を負わされたから。代償は弾くんの命。これは聞いてるわよね」

「はい」

「依頼費も大丈夫？」

「あ、はい。サイトにあった額ですよ？大丈夫です」

「そう。支払いは前払い。現金で今払ってくれるかしら。勿論、依頼が失敗すれば全額お返しします。それから写真、持って来てくれた？」

「あ、はい」

弾くんから一枚の写真と封筒を受け取る店長。写真には、声鳴楽と思われる青年が写っていた

「じゃあ後は約束だね。ミラちゃん」

呼ばれ、私は弾くんに向き直った

「呪ったことを誰にも言わないこと。依頼内容や依頼費については、遂行後に抗議も何もしないこと。遂行後は何があるかと、私達は責任を負わない。呪いを軽んじないこと。呪いを忘れないこと。呪いは無かったことには出来ないからね。これを守ると約束して下さい」

「わかりました」

私と店長は頷き合う

「それでは依頼を受理します。担当の者を呼ぶから、ちょっと待っててね」

そう言つと、店長はオフィスの奥へと消えた

「あのさ、もういいの？彼女に電話とか……」

「ありがとう。でも、今電話したら、会いたくなるから……今のこの覚悟が揺るぎそうなんだ。このまま格好付けさせといてくれないかな」

「うん……」

でもそれじゃあ彼女は悲しむじゃん。そう思った言葉は飲み込んで、違うことを口にした

「……わかった。もう何も言わない」

「ありがとう」

ガチャリとドアが開く。店長と魔術士のララが現れた

「ララ、彼が依頼者よ。弦白弾くん」

私達の前に立つララ。弾くんを無表情に見つめている

「これが呪う相手よ。声鳴楽」

店長が弾くんから借りていた、相手の写真をララに見せる

「殺害依頼よ。宜しくね、ララ」

頷いたララは、もう一度弾くんを見つめた

暫くじつと見た後、奥の部屋へ向かうララ。店長と弾くんが、後をついていった

「弾くん、さよなら」

奥の部屋へ入る直前、私は後ろから声を掛けた

「さよなら」

弾くんは振り返り、微笑んでくれた。あー、格好良いな

それから三人は奥の部屋へと姿を消した。これが、彼との別れになるんだろう……切ないな

私はソファーに座った。そのままズルズルと滑り、不恰好に座る

この前の消失依頼とも違う気持ちに、支配されていた

「何で……こう、上手くいかないかな……」

彼は、彼女を傷つけた。心に傷をつけたんだ

「それでも、守りたかった……？」

違うだろ。それは守ってなんかいない

「はぁ……」

本当に……

「バカばっか……」

そうボソツと呟き、目を閉じた。この気持ちは、私だけ？ ララも店長も誰も抱かないの？

「もう知らん……」

思考放棄。 思考停止。 現実逃避

また笑みを奪われる

今は仕事中。一旦沈んだら戻るのは、難しい。だから今は沈めない

だって私はまだ感情をコントロール出来る程、大人じゃない

今頃蝶は現れているんだろうな。声鳴も事故か何かに遭ってるんだろう

弾くんも地上の何処かに飛ばされ、事故に遭ってるのかな？

「死ぬ以外にも方法無いの？」

あるでしょ、絶対

でもそんな選択しか出来ない……か弱くも愚かな人間だから……  
そ、私も

事故は他の人に迷惑にならないようになってるんだって、前に聞いたことがある

「だからって死にたくはないね、私は」

ドアが開く。ララと店長が部屋から出てきた

勿論、そこに弾くんの姿はない

もう、二度と彼と言葉は交わせない

私は目を閉じた

「ミラ」

ララが私の隣に座る

「どうした、ミラ」

「……あのさ、師匠。何で人は人を恨んだり憎んだりするんだろうね？」

年下の彼女にこんなこと聞くのもおかしいかも、なんて思いつつ、ララなら答えてくれそうな気がする。実際は年下かどうか、断言出

来ないんだけど……

「人は、感情を持つ。憎しみも恨みも、愛情の一つであるのだから、仕方のないように思うが……」

「愛情？愛情だったら、憎まないでしょ。愛情の裏返しだって、憎しみは」

よく言うじゃん。愛情の反対は憎しみだって

「愛情の反対は、無関心だ」

無関心？つまり、憎しみすら抱かない、関係を全く持ちたくないってこと？あー、なるほどなあ。なら、憎しみも恨みも愛情の一種……か

「愛が憎しみになるかどうかは、心の持ちよう。寛容さでいくらでも変わるってとこ？」

「人それぞれだからな」

なるほどねえ

難しい話をさらっと言ってくれな、この見た目小学生少女は

「ま、私にはわかんないんだけど」

人を憎んだことも、恨んだことも、嫌ったこともない。苦手意識を感じたことはあるけど

「ミラは人を愛することもわからぬのだからな」

うん、人を好きになる気持ちもよくわかんない。だからかな……  
周りの友達みたいに、嫌いな子とかがいらない。ケンカをしたことも  
ないし

「両親は、変わらずか？姉も」

「うん、尊敬出来ないし。呆れる対象でもあるくらい。お姉ちゃん  
は忙しいみたいで、いつも一人で飛び回ってる。私は家が好きに  
なれないよ、師匠」

「そうか……」

私の親は、頼りないし、文句ばっかだし、本当イライラする。私  
は家にあまり居たくない

「悩め、ミラ。思考停止は悪い癖だ。答えは無いがな」

「わかったよ、師匠」

この世は答えが無いことだらけだってことくらい、私は知ってる  
それでも悩むことも

「こんにちはー」

「あら、ミラちゃん」

次の日、いつものように私は学校が終わると店へ向かった

「ミラちゃん、早速なんだけど、行ってきたくれる？」

一息つく間もなく……

「依頼ですか？」

「そ、ごめんね？」

「いや、仕事しに来てるんで別に良いですけど」

「ありがとー。ミラちゃん優しいー」

優しい、ねえ……

「じゃあ行ってきます」

「あ、待って」

「？」

オフィスを出ようとして、店長に呼び止められた。何だろ？

「気を付けてね。たぶん、依頼者じゃないから」

「あー……久し振りですね、そういうの」

「そうね」

依頼者の中には、依頼者のフリをする人がいる。それは、私達フリーゲルに接触したい人や興味本位の人、呪いで近しい人を失った人だ。呪いを憎み、フリーゲルを憎む人もいる

勿論、本当に呪いのせいかどうかは、私達にわからない。私達と関係なく失踪したり、殺されたり、事故に遭ったり、怪我をしたとしても私達のせいだと言ってくる人もいるのだ

「予知夢ですか？」

「まあね」

昨日の今日だ。もしかしたら、弾くんの関係者かもしれない

今朝の新聞の隅に、二人の事故死が載っていたし

「わかりました。行ってきます」

「ん、行つてらっしゃい。困ったら連れてきてね」

「はい」

私は店を出る。ケータイに送ってもらったデータを見れば、待ち合わせ場所は弾くんの時と同じ喫茶店だった

「高校二年生……同じ高校じゃん……」

可能性が益々高まる。てか、たぶんそうだろうな

喫茶店に着いた私は、昨日座った席を探す。と、そこには依頼者らしき制服を来た少年が座っていた

「どうも、フリーユージェルです」

「あんたが？」

ああ……うちの制服だ。でも、知らない顔だな

「はい。貴方が依頼者の歌謡かようくんですね」

「そうだけど」

黒髪の普通の高校生だな……弾くんはもつと柔らかい、優しい印象だったけど、歌謡くんは鋭さもある、今時の高校生ってカンジ。鍵くんみたいにチャラくはないけど

「本当にお前がフリーユージェルなのか？うちの制服じゃねーか、それ」

「バイトの下っぱだよ、私は」

「呪いの店のバイトなんて、フツーやるか？お前頭おかしいんじゃないの？」

……良いじゃん、別に。あんたには関係無いでしょ？！

「それより、依頼の確認だけど……えっと？近所に住む大学生、黄きす吹奏いかなでの左腕骨折依頼。間違いはないよね？」

「ああ」

「じゃあ宣誓して」

「あ？」

私は仕事モードに入った。歌謡くんが息を呑むのが伝わってくる

「宣誓して……同等の代償を払い、呪いが帰り、身を滅ぼそうとも、構わないと。人を呪わば穴二つ……わかるよね？」

「……っ、……代償？」

「左腕骨折が希望なら、貴方の左腕も差し出してもらおう。それが代償」

「同等の対価……オレの左腕を骨折させることが代償か」

「そういうこと。了承は？」

「……そういうことか……」

「？」

一瞬歌謡くんに怒りと憎しみを感じた。……気のせいじゃ、無いよね？

「あ？ああ、了承ね……わかったわかった」

今適当に頷きやがったな？！

「さ。さつさと案内しろよ。お前はバイトなんだろう？ だったらいるよな？ 店員なり店長なり……呪いを扱うやつが」

こいつ……頭良いのか？ 話が早いな

いや、それもだけど……こいつ早く店に行きたいんだ。あの宣誓があるのに、まるで自分には関係ないとも思ってるみたい

このまま連れていくのは簡単だけど……どうしようか。たぶん、予想通りだよな。だったら……

「嘘は、通じないよ。うちの魔術士、一流だから」

「魔術士……ふーん。お前も、薄々感付いてるカンジか？」

貫き通す気はない、か……

「本当の依頼は、別なんですよ？ 奏曲吹は関係ない。そうでしょ？  
おとなし音無歌謡くん」

そう言えば、歌謡くんは貼りつけていた笑みを消した。鋭い殺気、怒気が一気に放たれる

「私達への復讐ってどこ？ 恨んでいるから、私達に接触した」

「復讐なんて、バカげてるって知ってる。だからそんなことはしねーよ。ムカついてんのは本当だし、恨んでんのもかもしれない。とにかく、オレはお前らフリーユージェルと話がしたかった。……何で呪いなんて請け負う？ どうして弾を……弦白弾を殺した？！」

やっぱり弾くんの言ってた友達……

「弾くんの、依頼で……ちゃんと説明したし、何度も聞いたけど、弾くんは譲らなくて……決めるのは私じゃないし」

「……だろうな。弾は、そういうヤツだ。代償のこと聞いて、やっぱりって思った」

鋭さも怒気も薄らいでいく

「歌謡、くん……？」

「弾は、ストーカーを殺す依頼をしたんだろ？代償が自分の命でも構わない。それでも確実に殺せるなら……そんなこと言ったんだろ？」

「うん……」

「バカだよ……！あいつは、本当に……」

今、私はどんな顔で歌謡くんを見ているんだろう？同情？哀れみ？悲しみ？無関心？……無表情だったら、最悪だな

「フリーユージェルの店に行く？」

「依頼者でもねえのに？恨んでるかもしれないヤツを連れていくのか？」

そうかもしれない。だけど……

「まだ、納得してないんでしょう？私には答えられないこともあるし」

「なら、連れていってくれ。オレはまだ、知りたいことがある」

「……わかった。ついてきて」

私は彼を店に案内することにした

「ただ今戻りました」

「お帰りー、ミラちゃん。連れてきたわね、音無歌謡くん」

「はい。店長の言ってた通り、依頼者じゃなかったですけど」

店に着くと、雑貨店にはレッド先輩がいた。そのまま通り過ぎ、オフィスに入ると店長が出迎えてくれた

私の話を聞き、やつぱりねといつもの笑みを浮かべた店長は、歌謡くんをソファーに促した

「初めまして、私がフリーゲルの店長です」

「あんたが？」

「依頼は嘘つてことで良いのよね？」

「ああ。あんた達、フリーゲルに接触するための嘘だ」

そう。そう言って、いつものように笑う店長。本当にこの人は……

「あんだ、食えないな……何もかもわかってるみたいなカンジが、ム力つく」

確かに何もかもわかってるんだけどね、この人

「勘と頭の良い子は、私好きなんだけどね」

「そうかよ」

「で？何か聞きたいことは？ミラちゃんにもいろいろ聞いたんでしょ？」

店長は表情を崩さない。……流石だ

「弦白弾は、オレの友達なんだけど……あいつ、最後に何か言ってたか？」

「彼女とストーカー男の家族、自分の家族、それから友達……たぶんキミのことだと思うけど……その人達に、ごめんって伝えたいなって……ありがとって言ってたよ」

「弾……」

店長の言葉に、歌謡くんは俯き目を閉じた。拳が固く握られている

「バカ野郎……だったら死ぬなよ。そういうことは自分の言葉で伝えろよ」

声を震わせながら、ギリ……と奥歯を噛み締め、歌謡くんは憤った少しの間沈黙が流れ、深く息を吐いた、落ち着いた歌謡くんが顔を上げる

「弾のことは、さつきもこのバイトに聞いたから、納得はしてる」

弾のことは……か。じゃあ何が気になるんだろ？

「店長、あんたに聞きたいことがある。何故こんな店を始めた？！」

それは私も知らないことだ

「なんで呪いなんてものを請け負う！」

きつと歌謡くんは、正義感が強いんだろうな……そんなことを頭の隅で考えながら、話を聞く

「呪いは連鎖する。新しい憎しみ、恨みを誘発する。呪いなんてあるから、不幸が増えていくんだ！」

一方的に捲し立てる歌謡くん。店長は、全く表情を崩さない。ずっと聞いている

「代償とか、覚悟が要るとか、それで安易な考えのヤツは止めるかもしれない。でも、フリーゲルの噂はスゲー聞け。それでも依頼者は減らないんだろ？！」

確かに迷ったり、内容を軽減する人はいるけど、でも取り消したり止めたりする人は、殆どいない

「呪いなんて、問題の解決法として間違ってる！」

ああ、そうか……歌謡くんは、私が抱いていた小さな疑問達を、思考放棄した気持ちを今、言葉にしてるんだ

私が考えを止めた頃、歌謡くんは考えていたんだ……

そしてフリーゲルは、歌謡くんの信じる正義にとって、悪だったんだ

だから……歌謡くんは……

「さあ、答えてくれよ、店長さん」

こんなにも鋭く私達を睨むんだ

「フフ……凄いのね。誰もが少しは抱く疑問……だけど皆見て見ぬ振りをすることに、キミは向き合った。今時こんな子がいるなんてね」

歌謡くんは黙って聞いている。店長、何言いだしてんの？

「キミみたいに接触目的の子はいたけど、乗り込んできて呪いを否定したのは、キミが初めてよ」

「そうかよ」

フフ、と楽しそうな店長。私は口が挟めない

「何で呪いを請け負う店をやってるか？だったわよね。それは簡単よ……呪いを必要とする人がたくさんいるから。そして、うちの魔術士が、出来ることもなく力を持て余していたから……普通じゃない力を持った者に、居場所を与えたかったってのも、理由の一つかしら」

「ララの居場所……魔術士なんて、この時代……異端でしかないもんね」

「必要とする人がたくさんいるから？違うだろ！その依頼者達は、きっと他にも選択肢があつて、大変だけど皆が上手くいく結果の方法だつて絶対あつたはずだ！それを現実逃避するかのように、確実に簡単に問題を解決出来る方法を、目の前にぶら下げて食い付かせてきたんだろ！そんなの、絶対必要なものか！だったら言ってみろよ……呪いでしか解決出来ない問題つてヤツを……！」

「そうね……キミの意見なら納得出来ないわね。呪いでしか解決出来ない問題、か……そうね、だったら……」

「考え込む店長。だけど答えが出るまでに、そんなに時間は掛からなかった」

「凄く憎んでいる人がいて……大切な人を傷つけた、とかで……その相手を殺してやりたいとか不幸な目に遭わせたいとか、それほど憎んでいる人がいるとする。ならば考えるでしょう。どうやったら不幸にさせられる？相手の大切なものを奪う？相手の命を奪う？殺してやりたいなら、それでも良いと思うかもね。殺すにしたら、どうやったら確実に殺せる？もしかしたら計画は失敗するかもしれない。返り討ちにあうかもしれない。だったら、どうやったら確実に実行出来る？呪いなら……出来る。呪いなら、不幸にさせることも怪我をさせることも、殺すことも、何だつて出来る。確実に」

「それは、恨みが……」

「そう。この時代、キミみたいに復讐なんて意味がないとか、恨んだって仕方ないとか、そう思えるような人間が少ないのよ。キミの理想的な世界にしたいなら、恨む心を無くせる世の中にならないとダメよね」

「そう、だけど……だからって呪いがあって良い理由にはならない！」

「殺人事件は減ったわ。勿論殺人依頼が増えたわけでもないわよ」

「だからって……」

「それから、さっき言っていたけど……皆が上手くいく方法、だっただかしら？ そんなものが、いつだって選択肢の中にあるとは限らないのよ？ 現実はそのなりに甘くないわ」

押し黙る歌謡くん。理想と主張は、応援してあげたいところだけど……店長の言いたいこともわからなくはないし……でも店長の意見には、あんまり賛成出来ない……

「そうかもしれない……けどやっぱり認めねえ！ 呪いは恨みを助長する材料になる！ 恨む心は、無くせたら良いかもしれない。でも、無くさずに違う思いに昇華出来たら、もっと良いとも思う！ オレはこの主張を曲げない！ 呪いなんて、フリーゲルなんて、絶対オレが潰してやるからな！」

そう言って立ち上がる歌謡くん。そのまま店を出て行ってしまった

「行っちゃった……」

「また会えるわよ。にしても……なるほどねえ」

「？」

「ミラちゃんも、歌謡くんの意見に賛成なんでしょ？」

「あー……うん」

「それで良いのよ。それも理由なんだから」

「え？どういうことですか？」

内緒、と人差し指を唇の前で立てて微笑む店長。やっぱりさっきの演技入ってたな？！てことは、嘘も入ってたのか？

「うん、でも……そうね。最近はやっと何でもかんでも依頼受けすぎだったわね。これからはちょっと自重しなきゃ」

「え？」

「独り言よ」

そう言っただけで店長もオフィスを出て行ってしまった。一人残された私は、ただ首を傾げていた

もうすぐ今日が終わる。私はベッドの上で転がっていた

枕の下から一冊の小さいノートを出す。私の秘密日記だ

「今日は、と……」

音無歌謡くん。呪いについて……

私はペンを止めた。私の思いを代弁したかのような、彼の主張。  
この思いは何だ？

「後ろめたさ？……逃げていたから？」

考えを放棄することは、間違いなのだろうか？

「はぁー……」

私はノートを閉じた。枕下へ戻す

「知らん、そんなことは……」

綺麗事も、道徳も、常識も、並べたくなんかない……また、笑みを奪われる

私は明かりを消し、目を閉じた

運命とは、最もふさわしい場所へと貴方の魂を運ぶのだ——シェイクスピア

## 呪いと恋愛

殺したいほど憎んでいる相手がいますか？復讐したい人がいますか？恨みを晴らしたいですか？

それならば我々にお任せを

怪我をさせることも、不幸にさせることも、殺すことも出来ます。但し、代償を支払う覚悟のある方のみとさせて頂きます

呪い代行人「フリーユージェル」

学校が悩みの種になることが、よもや私の身に起ころうとは……

友達とお喋りしたり、先生の目を盗んで違う教科の課題したり、食堂行ったり、窓から外を眺めたり……そんな楽しい私の学校ライフが……！

隣の隣のクラスの音無歌謡くんは、邪魔されようとは……

どうしたものか……

「ミラちゃん、今日も可愛いわねー！でもー、やっぱり服はもう少し可愛くないとー」

「ゴスロリは嫌ですよ、店長」

てか、制服だし

私は今日も今日とて店に来ていた。はぁーと息を吐きながら、力  
パンを置いてヒーターの前を陣取る

暖かい……

「ミラちゃん、最近疲れてる？学校で何かあったの？」

ええ、ありましたとも

「音無歌謡くんが、教室に乗り込んでくるんです……お前らは間違  
ってる！って……」

「あらら……随分好かれちゃって」

「本気で言ってます？」

「やーん！ミラちゃん怖いー」

店長……ちょっとキモいです

「あ、そうそう。今日はレドくんと一緒に仕事してくれる？私、ち  
よっとお店留守にするから」

「もう一つの店ですか？フォルテピアノだっけ？」

「そうよ」

「私も行ってみたいなー……」

「今度ね」

出た。いつもの今度ね、が。その言葉にいつもかわされてしまう  
「依頼が来たらレドくんの指示に従ってね。彼なら私の代わりに受理しても問題ないから」

流石店長代理。決定権まであるとは

「じゃあ宜しくね」

「行つてらっしゃーい」

店長を見送り、私は雑貨店の方に顔を出した。カウンターにレド先輩がいる。この人いつも店にいるけど、本当に大学行ってんのかな？

「お疲れ様です」

「ん？ああ、ミラか。今は客いないから暇だぜ」

確かにガラッガラだな

あー、でも先輩と二人つきりかあ。先輩、顔良いし優しいし面白いし、結構好きなんだよね

高校生の頃からこの店でバイトをしている先輩は、大学一年生。この店ではパソコン担当で、フリーユーゲルのサイトの管理人でもある。情報収集が得意で、彼女はなく、怪奇好き。それがレド先輩で

ある

「店長もう行った？」

「はい。さつき」

先輩はカウンターに置いてあるノートパソコンに目を遣る

そこには、フリーゲルのサイトが開かれていた

黒を基調とした、雰囲気の出ているサイトは、先輩の自信作。パソコン得意とか、本当に高得点だよー

「依頼来てます？」

「んー、ちょっと待て……あ、来た」

うわ、タイミング良い

「依頼だ、ミラ」

カタカタとキーボードを叩く先輩。速いなあ

「ほら、データ」

笑顔で振り返る先輩。キラキラしてて格好良いと思っていたら、ポケットで震えるケータイ。先輩がデータを送ってくれたんだ

もう情報収集したの?!速すぎ!

「じゃ、頼んだぜ。案内係さん」

え……もう待ち合わせも連絡したの?!先輩のこの仕事見るの初めてだけど、速すぎー!

「ほら、何ボーツとしてんだ?」

「あ、はい。行ってきます」

私は店を出、依頼者との待ち合わせ場所に向かう

今回の依頼者は女性だ。私は待ち合わせ場所に向かう途中の踏み切りで、足止めを食っていた

今のうちにデータ読んどこーっと

電車が通り過ぎる。ふと視界の隅に入った花に目を遣った。そういえば事故があったんだっけ……

踏み切りを渡り、待ち合わせ場所に着く

「えっと……雑誌コーナー?ここか」

店からさほど離れていないコンビニが今回の待ち合わせ場所。相手は大学生

「んーと?不幸の依頼か。何々?」

待ち合わせ時間より早く着いてしまった私は、依頼者のデータをもう一度見ていた

「とにかく陥りたい?!何だそれ……浮気かぁ」

「あの……」

「ん?」

声を掛けられ振り向くと、明るめの茶髪の普通の女子大生が立っていた

「もしかして、フリーゲルの……」

「はい。貴方が依頼者の唱さん<sup>うた</sup>?」

「そうです」

今時の人だな……なかなか綺麗な人だけど、それ以外は普通そう

「早速だけど、依頼の確認を……彼氏、黄吹奏の不幸依頼。理由は彼が浮気を止めないから。オッケーですね?」

「はい」

黄吹奏って……歌謡くんの知り合いじゃん

と過った考えは押しやって

「じゃあ、宣誓して下さい」

「え?」

私は仕事モードに入った。空気が変わる

唱さんが息を呑むのが伝わってくる

「宣誓を……同等の代償を払い、呪いが帰り、身を滅ぼそうとも、構わないと。人を呪わば穴二つ……わかりますよね？」

「代償って……？」

「代償は対価。貴方の幸せ。不幸なら、貴方も不幸です」

「え……」

唱さんは愕然として言葉を失った

「そんな……」

「どうします？ 宣誓がなされないなら、この話は無かったことになりますか」

「……………」

唱さんは悩んでいるのか、口元に指をあてている

「……私の幸せ、か」

「どうします？」

私は待った。唱さんは目を閉じる。次に開かれた時には、決意が

固まったように彼女は口を開いた

「やっぱりいいわ。あんな男のために私の幸せが減るなんて、ムカつくことこの上ないもの」

「そうですか。では、依頼は無かったことで」

「そうね、申し訳ないけれど」

「いえいえ。それでは」

私は頭を下げ、その場を後にした。と、再びケータイが震える

「何だ？メール……？」

それは次の依頼データだった

私はレッド先輩に電話をする

「あ、先輩。さっきの依頼者、依頼破棄になりました。で、次の依頼データなんですけど、今から直接向かいますね」

『おう、悪いな。頼んだぜ』

「はい」

今日は珍しいな……こんなに連続で依頼が来るなんて……

「んーと？待ち合わせ場所は……公園か」

私は踏み切りへ向かって歩きだす。と、また踏み切りは降りていた

「今日はタイミング悪いなあ」

ぼやきながら電車を待つ。向こう側に、幼い子を連れた女性が歩いてきていた。先程の花の置かれていた場所で手を合わせている

関係者かな……？

女性が顔を上げた。私の視線に気付いたのか、こちらを見る。ヤバっ、目合っちゃった

咄嗟に目を逸らしたけど、たぶん気付かれてる。電車が来た。勿論女性は見えなくなる

電車が通り過ぎ、踏み切りが上がった。もうそこには、誰もいなかった

「あ、れ？」

首を傾げつつ、踏み切りを渡る。花は増えていた

立ち止まり、手を合わせる。それから公園へ向かった

「んーと？また黄吹奏！？」

データを見た私は思わず声を上げていた

何なんだこの男は。さっきから恨まれすぎ

公園の噴水前に着いた。一人の女性が立っている

「どうも、フリーゲルです」

「貴方が？」

あれ？この人……

「はい。貴方が依頼者の律さんですね」

「そうですけど」

似てる……

「早速ですけど、依頼の確認を……彼氏、黄吹奏の事故依頼。間違  
いはないですね？」

「はい」

「じゃあ宣誓を」

「え？」

私は仕事モードに入った。律さんが息を呑むのが伝わってくる

「宣誓して下さい……同等の代償を払い、呪いが帰り、身を滅ぼそ  
うとも、構わないと。人を呪わば穴二つ……わかりますよね？」

「代償……？」

恐る恐る聞いてくる律さん

「代償は同じものを差し出すことです。事故に遭わせるならば、貴方にも事故に遭って頂きます」

「えっ……」

「どうしますか？」

律さんは悩み始めた。男のために犠牲になるなんて……唱さんの言葉を思い出す

「事故って……度合いとか軽く出来ますか？私、彼にちょっと痛い目に遭ってもらいたいだけで、殺したいわけじゃないんです」

「出来ますよ」

「じゃあ、それでお願いします」

「わかりました。それでは店へご案内致します」

私は律さんを店に案内した

「お帰りミラ。依頼人、ちゃんと連れてきたな？」

「はい。宣誓は済ませました」

店のオフィスのソファア。律さんと並んで座り、先輩の指示を仰ぐ

「ん。じゃあオレからの話だな」

そう言つて先輩は、前のイスに座つた

「律さん。初めまして、オレはフリーユージュルのレドです。早速だ  
ど、話をしますね」

「あ、はい」

「依頼は彼氏、黄吹奏さんの事故依頼。理由は浮気癖が治らないた  
め。代償は律さんの事故遭遇。これは聞いてますよね」

「はい」

「依頼費も大丈夫ですか？」

「あ、はい。サイトに書いてあつた額ですよ。大丈夫です」

「そうですか。支払いは後払い。現金でも振込みでも構いません。  
写真、持って来て下さってますか？」

「あ、はい」

律さんから一枚の写真を受け取る先輩。そこには、黄吹奏と思わ  
れる青年が写っていた

すっごい格好良い！芸能人みたい……

「じゃあ後は約束だけだな。ミラ」

呼ばれ、私は律さんに向き直った

「呪ったことを誰にも言わないこと。依頼内容や依頼費については、遂行後に抗議も何もしないこと。遂行後は何があるかと、私達は責任を負わない。呪いを軽んじないこと。呪いを忘れないこと。呪いは無かったことには出来ませんからね。これを守ると約束して下さい」

「わかりました」

私と先輩は頷き合う

「それでは依頼を受理します。担当の者を呼びますので、ちょっと待ってて下さい」

そう言うのと、先輩はオフィスの奥へと消えた

「あの……」

私は先輩が消えたドアを見ながら口を開いた

「良いんですか？そんな浮気男のために、事故に遭うなんて」

「そうね……バカよね、私。これも惚れた弱みかしら……ムカつくのに、別れられないのよ。いつも、新しい彼女にフラれては私のトコに帰ってくるの。それでもちよつと痛い目に遭わせてやりたくて……ちよつと彼に電話させてね」

律さんは黄吹さんに電話を掛けた。浮気を止めないと、痛い目に

遭うよと軽く脅している

でもそれで浮気は無くなるの？貴方は、幸せになるの？そう思った言葉は飲み込んで、違うことを口にした

「呪いを、甘く見たらダメですよ？」

「わかってる……わかってるの」

ガチャリとドアが開く。先輩の隣には、呪いを扱える魔術士のラがいた

「ララ、彼女が依頼者だ。音無律さん」

私達の前に立つララ。律さんを無表情に見つめている

「これが呪う相手。黄吹奏さん」

先輩が律さんから借りていた、相手の写真をララに見せる

「軽度事故遭遇依頼だ。宜しく」

頷いたララは、もう一度律さんを見つめた

暫くじっと見た後、奥の部屋へ向かうララ。私達も、後をついていった

「律さんは、その黒いイスに」

部屋はいかにもな、怪しげな雰囲気漂っている。魔術用道具が

並び、黒いカーテンで窓は閉じられ、明かりは蝋燭と隙間から漏れる日光のみ。依頼者が座る黒いイスの真下の床には、魔方陣が描かれている

律さんが言われた通りにイスに座った

ララが彼女の前に立つ

「始まるな」

ちよつとわくわくした先輩の声。私は無言で壁際に立っていた

「汝、名を」

ララが喋った。小さいけれど、澄んでいて心地好く耳に届く声

「音無、律」

「汝、もう同じ心、姿では二度と戻らぬこと……覚悟は良いな？」

「……はい」

ララの迫力に気圧されたのか、律さんが息を呑み、返事する

「そうか……ならば、致し方あるまい」

そうボソツと呟いたかと思うと、ララは空中に何かを書き出した。それは、床に描かれた魔方陣を発動させる魔法の始まりだった

「憎い相手を思い浮かべて、目を閉じよ」

律さんが言われた通りにする。と、部屋の空気が変わった

ひとりでに蝋燭が消え、いつの間にか日光も全て遮断され、室内は闇に包まれた。聞こえていた街の喧騒も、何もかも聞こえない。

ここは、今やオフィスの奥の部屋であって、違う世界でもあるのだ

魔方阵が光り出す。ララと律さんが見えた。ララの指が空を踊る。そこには、キラキラと光るものが舞っていた。蝶だ。光る蝶が次から次へと姿を現し、やがてそれは律さんの体へと集まっていった

私はもう、何十回と見てきた。いつもと変わらない、魔法の光景  
そして、この後に何が起こるかも当然知っている

「っ……！」

蝶が消えた瞬間、彼女は姿を消していた

今頃、写真の相手、黄吹奏さんも、律さんも、地上のどこかで事故に遭っているんだろう

私には、想像でしかないのだけれど

私は雑貨店にいた。レド先輩と並んでカウンターに座る。お客さんは、学校帰りの学生が二、三人つてとこかな

ま、和風の小物とか鉱石使ったストラップとか、結構可愛い物売

ってるよねー、この店

「律さんって、あれでも幸せなんですかねー？」

「さあーな。女の気持ちはわかんねーよ」

「女だからわかるわけじゃないですよ？」

そうだな、と先輩は呟くように言った。お客さんは、一通り商品を見て帰っていった。私達は二人きりになる

「先輩こそ、黄吹さんの気持ちとかわかるんですか？」

先輩が浮気癖のある人ならわかるのかも

「わかんねーよ。オレ、これでも一途だぜ？」

冗談っぽく笑って言う先輩。くっ……ドキッとするじゃん

「そんな乙女みたいなこと言わないで下さいよ」

照れ隠しにそう言ってやる。先輩も冗談めかして言ったようで、楽しそうに笑っていた

浮気……しないっての本当かな？

「それに今彼女いねーしな」

それは知ってます

「じゃ、じゃあさ、先輩……私と付き合ってみませんか？な、なーんて」

出来るだけ冗談っぽく言っ たつもりだけど……変に思われたかな？

うー……凄いドキドキしてる。どんな返事が返って来るんだろ

私は先輩の方を窺うように見た

「それもありかな」

笑いながら言う先輩は、冗談と思ってるみたい。でも嫌なんて言われるより数倍マシだよ！

「でも、ミラ。お前、オレじゃなくても良いんじゃないか？」

「え？」

何？どういうこと？

「オレよりタイプな、本当に良いヤツが現れて、お前のこと好きって言うてきたら、そいつと付き合うだろ？」

うー……それは……

「わ、わかんないですよ……そんなの」

「揺らいだな」

「そ、それは……」

「それでもオレが良いって言うてくれるような女と、オレは付き合いたいんだ。ごめんな？」

何で……謝るの？これ、冗談じゃ、なかったの？

「あ、あはー、そーですよー。先輩は、もっと可愛い子の方が良いですよー。私、ちょっとトイレ行ってきますねー」

「え、あ、ああ……」

立ち上がった私は、顔を見られないようにトイレに向かった

「なんて顔してんのよ、私」

やだ……めちゃくちゃ泣きそうな顔。見られなくて良かった

鏡を見ながら、溜息を吐く

「フラれちゃった……のかな？でも、同じようなもんか」

ただ、ちょっと良いなって思ってるだけのハズだったんだけど……

「私、そんなに先輩のこと好きだったの？」

自嘲気味に笑いながら鏡の自分に問い掛ける

「バカみたい……」

私は顔を洗った。今は仕事中。気を引き締めないと！

「よし！」

笑顔を確認して、トイレを出る。と、そこには事故に遭っているハズの音無律さんがいた

「り、律さん?!」

「あ、あのっ、私事故に遭わないんですけど、大丈夫なんですか？呪いが失敗したんですか?!」

「え？」

事故に遭わない？失敗?!そんなこと、今まで一度も無かったのに……

「すみません、ちょっと確認を取りますので少々お待ち下さい」

先輩はそう言つと、どこかに電話を掛けた

「黄吹さんも事故に遭ってないんですか？」

「うっん、遭ってるの。軽症だけど」

え？黄吹さんは遭ってるのに、音無さんは遭ってないの？もう訳わかんないよー

「もしもし、フォルテピアノさんですか？フリーゲルのレドです。店長お願いします」

店長に聞くのか。わかるのかなー？

「あ、もしもし店長、レドです」

『はいはい、どうしたの？』

店長の声デカっ！私にまで聞こえてくる

「呪い一件実行したんですけど、依頼者が代償を受けてないと今店にいらっしやっているんです」

『呪いの詳細は？』

「軽度の事故依頼。相手の男性は事故に遭ったそうです。依頼者がまだだそうで……ララの呪いはいつも通り、滞りなく実行されました」

『依頼者に何か特別な点は？』

「いえ、特には」

『名前は？』

「音無律さんです」

『何か聞いたことあるわね……ちょっと待ってて。ねー、音無律さんって前に依頼無かった？え？あー、そうよね。うん、あ、あー……わかった、それね。あ、もしもし？律さんに聞いてみて。超能力があるって言われたでしょ？って』

「超能力？」

『そ。理由はたぶんそれね。でもマズイわね。それじゃあ代償が支払われてない……今からそっちに向かうわ。確認だけしておいて。宜しくね』

「あ、はい」

先輩は電話を終えたようだ。でもさっきの超能力って……？

「店長、こっち来るってさ」

聞こえてましたよ。でも、近いのかな？フォルテピアノって

「お待たせ致しました、音無さん。少々伺いたい事があるんですが……」

「はい」

「以前フォルテピアノという店で依頼をしたことが？」

「はい、ありますけど」

「そこで店員に超能力が有ると言われませんでしたか？」

何依頼なんだろう……。でも超能力って、凄ーい

「はい、言われました」

「恐らく、その力が原因だと思われます。訓練などはした事は無い

ですよね？でしたら、その不安定な力が音無さんの無意識に作用したと思われます。間もなく店長が到着しますので、少々お待ち下さい」

「はい……」

律さんは心配そうに頷いた。私は律さんに近寄る。聞きたいことがあるんだよねー

「律さん、ちょっと良いですか？」

「え？ええ」

「フォルテピアノってうちの店長の店なんですよ。私、一回も行った事無くて。どんなカンジでした？」

「私のお店には行った事無いのよ。家に来てもらったの。私、不思議な事がたくさん起きて、悪霊じゃないかって怖くなって。それで悪霊退治依頼をしたの」

「へー。悪霊いたんですか？」

「まあ、ね……」

「そうなんだー」

「でも、フォルテピアノの店員さん、貴方のお姉さんじゃないの？貴方の背を少し高くして、髪は真っ黒に、黒い服を着て、ニーハイにブーツ、ネイルはシルバー。あ、シルバーアクセもしてたわね」

確かにそれ、姉の特徴ですけど……

「えー……」

私が脳内で混乱していると、勢い良く雑貨店の扉が開いた

そちらを自然、見やればそこには息を切らせた店長が立っていた

「た、ただいま」

「お、お帰りなさい」

いつもの余裕を含んだ笑みがない店長は、何だか違和感の塊だった

「どうも音無さん。私がフリーユージェルの店長です。ちょっとオフィスに行きましょうか。レドくん、こっち閉めて良いわよ」

「はい」

私達三人はオフィスに向かい、ソファアに座った

「やっぱり超能力があるのね？ シドくん達が言うんだから間違いないわね」

シド？ フォルテピアノの人かな？

「店員に話は聞いたと思うけど、それはオツケーかしら？」

「あ、はい」

「このままでは、代償が支払われていないわけですから、呪いの力が返って来る事になると思われます。それは避けたい……ですので、音無さんには代償を支払って頂きたいと思います。宣誓した内容を、事故に遭うという代償を実行して頂きます」

「でも、私……自分では力をコントロール出来なくて……」

「わかっています。今貴方は無意識に事故に遭うことに非常に強い恐怖を感じているようなので、それを取り除き、力が働かないようにしましょう」

「そんなこと出来るんですか？」

私の質問に、店長はいつもの笑みを浮かべて、頷いた

「少々お待ち下さい」

そう言って店長は奥の部屋に消えた。ララの魔法で何とかするってこと？でもララ、そんな魔法使えるのかな？呪い以外、見たことないけど……

奥の部屋のドアが開く。店長とララがそこにいた

「ララ、彼女に代償を払えるようにして」

こくりと頷くララ。じつと音無さんを見つめている。私は黙って見守ることにした

「力を持つことは、相応のものを呼び寄せる……欲するとは、愚かな」

そうララは呟くように言った。もしかして、怒ってる？

「制御出来ぬ力は、身を滅ぼしかねんぞ……それでも汝は、特別を求めんとするか……悪霊の影をちらつかせおって……好奇心は良いが、度がすぎるぞ。汝に降霊術は危険だ」

「あら、まだ止めてなかったのね。報告書にもあったけど……ララ、そういう人もいるのよ。注意は既に行っているわ。これ以上は、本人の判断に任せましょ。それよりも、代償の方が大変だわ」

こくりと頷くララ

「致し方あるまい……」

ララは指を空に踊らせ始めた。後から蝶が追っていく

指が律さんを指し示すと、蝶は次第に律さんに集まっていった

そしてララが指を下ろした瞬間、蝶は全て消えた

「力を一時眠らせた」

「ありがとう、ララ」

じゃあこれで律さんは事故に遭うんだ……それも複雑だけど

それから律さんを見送り、私はオフィスのソファに座った

店長はまたフォルテピアノに行っちゃっし、ララは奥の部屋に籠

もるしで、私はまた、先輩と二人になった

「帰るか」

「そうですね」

私達は、何事も無かったかのように店を後にした

律さんが事故に遭ったのかどうかは、後日依頼費を持ってきた時の包帯で一目瞭然だった

そして嬉しそうに、今回の事で彼が反省し、浮気をしなくなったと話していた。これで、良かったのかな？

もうすぐ今日が終わる。私はベッドの上で転がっていた

枕の下から一冊の小さいノートを出す

「今日は、と……」

音無律さん、黄吹奏さんの想いについて……

私はペンを止めた。先輩のことを思い出したのだ

「……はあー。今なら言えるのに」

それでも迷わないと

「もう遅いのかな？」

私はノートを閉じた。枕下へ戻す

「もう知らん……」

綺麗事も、道徳も、常識も、並べたくなんかない……また、笑みを奪われる

考えたって仕方ない

他にも気になる事はたくさんある。音無に姉のことだ。今度帰って来たら問い質してやる

私は明かりを消し、目を閉じた

人間性について絶望してはいけません。なぜなら私達は人間なのですから——アインシュタイン

## 呪い幻想詩

殺したいほど憎んでいる相手がいますか？復讐したい人がいますか？恨みを晴らしたいですか？

それならば我々にお任せを

怪我をさせることも、不幸にさせることも、殺すことも出来ます。但し、代償を支払う覚悟のある方のみとさせて頂きます

呪い代行人「フリーユージェル」

私はオカルト好きだが、靈感はない。いや、ないから好きなんて言えるのかもしれない。でも実は、ないわけでもなかったりする

店長じゃないけど、一度だけ予知夢を見た。何かの声か音かを聞いたこともある。変に勘が働く時だってあるし……

だけど只の偶然かもしれない。わからない。だから、ないことにしておく。それで良い

「あれ？店長？」

今日は日曜日。朝から店に来たが、店長はいなかった

「店長はフォルテピアノに行ってるよ」

「あ、レド先輩。おはようございます」

「おはよう、ミラ」

「今日もフォルテピアノか……私も行ってみたいなー、フォルテピアノ」

「それは暇な時にしてくれ。それより、依頼だ」

朝からー？

「んな顔すんなよ」

そんな顔に出てたかな？

「む……行ってきます」

「ん、宜しく」

データを受け取り店を出て、依頼者との待ち合わせ場所に向かう  
今日は少し暖かくなると予報で言っていた。このまま秋すっ飛ばして冬になるのかと思ったよ

木々が赤く、黄色くなってきている。紅葉狩りしたいなー。落ち葉で焼き芋も良いな……ま、今時落ち葉でなんて、するとこ少ないだろうけど

「えっと、ここだよね」

店からさほど離れていない踏み切りが今回の待ち合わせ場所。相手は女性

「んーと？事故の依頼か。何々？」

待ち合わせ時間より早く着いてしまった私は、ケータイに送ってもらった依頼者のデータを見ていた

「人身事故？ふんふん……あ、これってこの前の事故？献花ねえ……」

「あの……」

「ん？」

声を掛けられ振り向くと、黒髪のちょっと暗そうな女性が、幼い子連れて立っていた

「もしかして、フリーゲルの……」

「はい。貴方が依頼者の記符<sup>きふ</sup>さん？」

「そうです」

この人この前、ここで見かけた人だ……花を供えて手を合わせていた……やっぱり関係者だったんだ

「早速ですけど、依頼の確認を……旦那さんの元同僚、鼓詩音<sup>つづみしおん</sup>さんの事故依頼。理由は彼女が旦那さん突き飛ばし、死ぬ原因を作ったため。オッケーですね？」

「はい」

「じゃあ、宣誓して下さい」

「え？」

私は仕事モードに入った。空気が変わる

珍しく記符さんは顔色一つ変えなかった。大抵この時は、皆息を呑むんだけどな……

でも女の子の方は、記符さんの後ろに隠れちゃったな。で、そんなことより仕事仕事

「宣誓を……同等の代償を払い、呪いが帰り、身を滅ぼそうとも、構わないと。人を呪わば穴二つ……わかりますよね？」

「代償って？」

「代償は対価です。今回は事故なので、貴方にも事故に遭ってもらうことになります」

「死の危険を伴う事故なら、私も同じように死を覚悟しないといけないんですね？」

記符さんは淡々としていた。動じる事も驚く事もなく、そう言ったのだ

「そういうことになります。重度の事故をお望みで？」

「はい」

「そうですか。わかりました。では、宣誓をして頂けるといこと  
で、構わないんですね？」

「はい」

何だろ、この人。死ぬつもりなのかな？

「わかりました。それでは、店へご案内致します」

「はい」

私は背後で電車が通り過ぎる音を聞きながら、彼女達と一緒に店  
へ向かった

「お帰り、ミラ。依頼人、連れてきたな？」

「はい。宣誓は済ませました」

店のオフィスのソファー。記符さん達と並んで座り、先輩の指示  
を仰ぐ

「じゃあオレからの話だな」

そう言って先輩は、前のイスに座った

「記符さん、初めまして。オレはフリーゲルのレドです。早速ですが、話をしますね」

「はい」

「依頼は旦那さんの元同僚、鼓詩音さんの事故依頼。理由は彼女が旦那さんを突き飛ばし、殺害したため。代償は記符さんの事故遭遇。これは聞いてますよね？」

「はい」

「依頼費も大丈夫ですか？」

「はい。サイトに書いてあった額なら持って来ています」

「そうですね。支払いは前払い。現金で今お願いします。勿論、依頼が失敗すれば全額お返し致します。写真は持って来て下さってますか？」

「はい」

記符さんから封筒と一枚の写真を受け取る先輩。そこには、鼓詩音と思われる女性が写っていた

「じゃあ後は約束だけだな。ミラ」

呼ばれ、私は記符さんに向き直った

「呪ったことを誰にも言わないこと。依頼内容や依頼費については、遂行後に抗議も何もしないこと。遂行後は何があるうと、私達は責

任を負わない。呪いを軽んじないこと。呪いを忘れないこと。呪いは無かったことには出来ないのです。これを守ると約束して下さい」

「わかりました」

私と先輩は頷き合う

「それでは依頼を受理します。担当の者を呼ぶので、少々お待ち下さい」

そう言うと、先輩はオフィスの奥へと消えた

「あの……」

私は先輩が消えたドアを見ながら口を開いた

「鼓さんと旦那さんって、その……只の同僚だったんですか？何かトラブルでも……？」

「あの女、一方的に夫に言い寄ってたみたいなの。夫が言ってたわ。最近困ってるって。どうせ、フラれたから頭に血が上ったんじゃない？」

本当にそうだとして、死ぬかもしれない復讐を実行するの？小さい娘がいるのに？そう思った言葉は飲み込んで、違うことを口にした

「お子さんですよ？何歳なんですか？」

「三歳よ。ちょっと人見知りで」

「そうなんですかー。可愛いー」

ガチャリとドアが開く。先輩の隣にはララがいた

二人がこちらに歩いてくる

「ララ、彼女が依頼者だ。五藤<sup>いつふ</sup>記符さん」

私達の前に立つララ。記符さんを怪訝に見つめている

どうしたんだろ？

「これが呪う相手だ。鼓詩音さん」

先輩が記符さんから借りていた、相手の写真をララに見せる

「重度事故依頼だ。宜しくな」

「……」

ララは、もう一度記符さんを見つめた

暫くじつと見た後、奥の部屋へ向かうララ。私達も、後をついていった

「記符さんは、その黒いイスに。真ん中にある一人用のイスです。お子さんはどうします？お預かりすることも出来ますが」

「一緒に居ます」

「わかりました」

部屋はいかにもな、怪しげな雰囲気漂っている。魔術用道具が並び、黒いカーテンで窓は閉じられ、明かりは蠟燭と隙間から漏れる日光のみ。依頼者が座る黒いイスの真下の床には、魔方陣が描かれている

記符さんが言われた通りにイスに座った。傍には女の子がいる

ララが彼女の前に立つ

「始まるな」

ちよつとわくわくした先輩の声。私は無言で壁際に立っていた

「汝、名を」

ララが喋った。小さいけれど、澄んでいて心地よく耳に届く声

「五藤記符……」

「汝、宿命は来世にも継ぐ。合縁奇縁……もう同じ心、姿では二度と戻らぬこと……覚悟は良いな？」

「はい」

ララの迫力に気圧されることもなく、記符さんは淡々と返事をする

「そつか……ならば、致し方あるまい」

そうボソツと呟いたかと思うと、ララは空中に何かを書き出した。それは、床に描かれた魔方陣を発動させる魔法の始まりだった

「憎い相手を思い浮かべて、目を閉じよ」

記符さんが言われた通りにする。と、部屋の空気が変わった

ひとりでに蠟燭が消え、いつの間にか日光も全て遮断され、室内は闇に包まれた。聞こえていた街の喧騒も、何もかも聞こえない。ここは、今やオフィスの奥の部屋であって、違う世界でもあるのだ

魔方陣が光りだす。ララと記符さん達が見えた。ララの指が空を踊る。そこには、キラキラと光るものが舞っていた。蝶だ。光る蝶が次から次へと姿を現し、やがてそれは記符さん達へと集まっていた

私はもう、何十回と見てきた。いつもと変わらない、魔法の光景

そして、この後に何が起こるかも当然知っている

「っ……！」

蝶が消えた瞬間、彼女達は姿を消した

今頃、写真の相手、鼓詩音さんという女性も、あの親子も、地上で死ぬかもしれない事故に遭っているんだろう

私には、想像でしかないのだけれど

雑貨店を先輩に任せ、私はオフィスで休憩中。ご飯をララと一緒に食べて、寛いでいた

ララも珍しく部屋から出て、一緒にソファーに座っている

「師匠つて、呪い以外にも魔法使えるの？」

「破壊に繋がる魔法ならば」

「破壊？」

「壊したり奪ったり停止したり……そういった終わりに繋がる魔法ならば、使える」

「へー」

呪いだけじゃないんだ

「先程の女だが……」

「え？」

「……いや、何も思うところが無かったのなら、それで良い」

何か気になる言い方だな……

ララはそれから部屋に戻ってしまった

「さ、仕事仕事」

いつまで休憩してんだって、先輩に怒られちゃう

私は苦笑しながら、雑貨店に向かった

「ミラ、依頼だ」

「あ、はい」

「ちょっと待てよ。データ集めるからな」

店内掃除をしていた私に、突然の依頼の知らせ。ま、依頼はいつも突然なんだけど

「あれ？何だ、これ……この名前……」

「どうか、したんですか？」

先輩の手が止まるなんて……何があっただろ？

「偶然か……？いや、違うな」

「？」

ぶつぶつ何かを言いながらキーボードを叩く先輩

「ミラ、さっきの依頼者の名前は？」

「えっ……五藤記符さんです」

「呪い相手は？」

「えっと、鼓詩音さんです」

「理由は？」

「鼓さんが五藤さんの旦那さんを殺したからです」

「だよな……」

「一体何なんだ？」

「今回の依頼者……五藤<sup>て</sup>笛さん、五藤記符さんの夫だ」

「……………え」

私の思考が一旦停止した。いやいや、どういつこと？

「死んだはずじゃ……」

「そんな勘違いするわけないし……まあさっきの依頼、夫や事故の詳細まで調べてはないけどな」

そう言って先輩はキーボードをまた叩き始めた

「ミラは、事故のこと何か知ってるか？」

「その踏み切りでの人身事故ですね。死者が出たとしか……」

「あ、これか。あつたぞ……」

先輩が見つけたデータを読み上げてくれた

「踏み切りの……人身事故……亡くなったのは、近所に住む専業主婦、五藤記符さん三十歳と、五藤さんの娘、こと琴ちゃん三歳の二人……」

「え……」

それって、さっきの二人じゃ……

「じゃ、じゃあ……さっきの二人は……？」

「ま、まさか……」

「で、でもちゃんと足りましたよ！お金も写真も受け取って……」

「その写真どこ行った？お金は？」

どこに置いたか記憶がない。私達は、血の気が引いた

そこにララが姿を現す

「あ、ララ。さっきの依頼者なんだけど……」

「ああ……ようやっと気付いたか」

「それって……」

「気付いたのでは無いのか？彼女らの依頼は幻ぞ。生きてはおらぬ」

ララは嘘は言わない。言い回しがたまに難しいだけ。そして、そのララが当たり前かのように口にした言葉。それは私達二人を動揺させるには、十分すぎた

「でも私、靈感なんて……」

「万人に見せることも可にする……彼らは思いが強いからな」

思い……？記符さんは私達にその姿を見せ、依頼をし、生きていないことをわからせないほどの強い思いを、憎しみを、抱いていたというのだろうか

「でも何で？何で旦那さんが殺されたなんて嘘を……」

「嘘？彼女は嘘など口にしておらぬ。そう思い込んでしまったのだ」

思い込み？

「五藤笛には見えなかったのだろうな……こんなに話し掛けても気付いてくれない……そして微かにある踏み切りと電車の記憶……彼女は自分が死んだと、気付いてはいない」

死んだことを知らない……？

「そんなこと……え？てことは鼓さんは無傷？」

「そうだ」

うえーめんどくさー

「それで？新しい依頼では無いのか？」

あ、忘れてた

「先輩、五藤笛さんは何の依頼を？」

「鼓詩音さんの、殺害依頼だ」

殺害……

「ミラ、取り敢えず行ってきてくれ」

「はい……」

頷き、データを受け取る。何だかスッキリしないなあ……

歩きながらデータを見る。そこに書かれた理由に、一瞬息を呑んだ

「うわ……」

待ち合わせ場所の踏み切りへ向かう。と、依頼者はもう来ていた

「どうも、フリーユージェルです」

「貴方が？」

疑われてるよ

「はい。貴方が依頼者の五藤笛さんですね」

「そうです」

ふーん……まあモテるかもね、この人

「早速ですが、依頼の確認を……同僚、鼓詩音さんの殺害依頼。間違いはないですね？」

「はい」

「じゃあ、宣誓して下さい」

「え？」

私は仕事モードに入った。笛さんが息を呑むのが伝わってくる

「宣誓を……同等の代償を払い、呪いが帰り、身を滅ぼそうとも、構わないと。人を呪わば穴二つ……わかりますよね？」

「……っ、代償？」

一瞬怯んだのか、詰まりながら言う笛さん

「代償は同等の対価です。命を奪いたいなら、貴方の命を差し出して頂きます。どうされますか？」

「死ぬってことか……そうだな、それも良いかもな……」

「……あの、信じてもらえないかもしれませんが、先程同じような依頼があつたんです」

「え？」

私は思い切つて話してみた。記符さんが琴ちゃんを連れ、この場に現れたこと。詩音さんを恨み、憎み、依頼をしたこと。信じてもらえないかもしれない。けど、話さずにはいられない。……いつもなら、そのままお店に行くのに……今日は私、どうしちゃったんだろ？

「まさか……二人はもう……」

「はい。私達も、まさかつて思いました。でも、確かにいたんです」

「……おかしな冗談は止めてくれ。依頼が出来ないなら出来ないって言つたらどうなんだ？」

「違います！依頼を遂行することは簡単です。だけど、記符さんは今でも彷徨っているんです！自分が死んだと気付くことも出来ずに」

「……気付いて、いない？」

電車が通り過ぎる。生じた風が、供えられた花を揺らした

白い光が灯る

「あ……」

笛さんの隣に、記符さんが立っていた

「記符さん……」

「き、ふ……」

「私、死んでたのね……ごめんなさい、笛さん……この人の言っていることは本当よ、信じて。私ずっと笛さんの傍にいたの……貴方は、気付いてくれなかったけど」

「記符……すまない……記符……」

記符さんが私に近づく

「手を合わせてくれて、ありがとう」

ああ、あの時……

「いえ」

「笛さん……依頼した私が言つのも何だけど、死なないでね……お願い……」

「記符……」

記符さんはもう一度、お願いと言って姿を消した

こんなことって、あるのかな……

夢のようなぼんやりした心持ちを破ったのは、笛さんの声だった

「先程は、疑ってすまなかった……」

「いえ……」

「依頼は、ちょっと考えさせてくれ」

「はい、わかりました」

私は笛さんと別れ、店に戻った

「ただ今戻りました」

「お帰り、ミラ。どうなった？依頼者」

「それがですね、聞いて下さいよー」

私は雑貨店のカウンターに行き、先輩に先程の出来事を一部始終話した

「出た、のか……」

「出ました」

「そうか……ま、特殊なケースだったが、復讐の連鎖が起きなかったのは、不幸中の幸いか」

「そうですね」

「幽霊からの依頼か……フォルテピアノの連中なら得意そうなんだけどな」

へえー、そうなんだ

「フォルテピアノに、靈感の強い人がいるんですか？」

「ああ。フォルテピアノのシドはオレのいところで、寺出身の悪霊退治の専門家だし、レミって子はララの双子の妹で、降霊、霊媒や召喚に長けた子だからな」

「先輩のいところに、ララの双子の妹ー？！ララって双子だったんですか？！しかもそんな身内で成り立ってるんですか！？」

「あれ？フォルテピアノの言霊使い、ミラの関係者じゃなかったか？」

う……やっぱりそうなんだ

「たぶん、そうです」

最近お姉ちゃんとは仕事が忙しいのか、会っていないから聞けずにいるんだよねー

そんなことを考えていると、店の扉が勢い良く開いた。反射的にそちらを見やれば、そこには音無歌謡くんが立っていた

何で休みの日でも歌謡くんの顔見なきゃいけないのよ

「いらっしやい、ませ……何か「姉が世話になったらしいな」

やっぱり姉弟だったか……音無律さんは

歌謡くんは、ズカズカと店内に入ってきた。カウンターの前に立ち、いつものように不機嫌そうな顔をしていた

今から何言われるか、予想がつくぞ、私

「姉はあれで幸せらしいが……オレは認めねえからな」

ん？幸せなんだ、律さん……

「姉が誰と付き合おうが、何をしようがオレには関係ない。だが、呪いで解決することは認めない」

もうそれ聞いた……

「音無歌謡くんだけ？キミ、うちでバイトしないか？」

………は？

「な、何言って……」

「どういっつもりだ？」

「ん？良い話だと思うけど。音無くんは呪いを邪魔出来るかもしれない。オレ達は、必要性を伝えられるかもしれない。このまま言い争うよりは、良いと思うけど。これは店長の意志だから、キミさえ良ければ今すぐにも雇えるよ」

一理あるような……ないような……

「どうする？」

歌謡くんは考え始めた。迷っているようだ。そりゃあ私に、呪いの店なんかでよく働けるな、とかなんとか言ってたしな

私は先輩の顔を窺うように見た

……何か、楽しんでない？

「わかった。その話、受けさせてもらっ

「えっ……」

マジで？！

歌謡くんは私に向き直った。不適な笑みを浮かべている。……うつ、格好良い……

「宜しくな、先輩」

見下すような言い方してくれちゃって……！何が先輩よ！

「絶対潰してやるからな。覚悟しとけよ？」

凄い自信……

「音無くん、来れる時に来てくれたらいいから」

それいいなー。私もその契約がいいー

「わかりました。それじゃあ今日は失礼します」

そう言つて、歌謡くんは踵を返し、店を後にした

「潰すつて言つてましたよ？」

「そうだな」

「大丈夫なんですか？」

「大丈夫なんだろ。店長が決めたことだ」

「だけど……」

心配だ……店長が決めたことだから、口出しは出来ないし、何か考えがあつてのことなんだろうけど……でもやっぱり

「大丈夫だよ」

何で先輩は笑つて大丈夫なんて言えるの？

「心配性だな、ミラは。ま、なるようになるさ」

「……はい」

私は先輩の笑顔に苦笑しつつ、ここは妥協した。今考えたつて、仕方ないから。答えはないし、出るより早く未来はやってくる

それから私達は雑貨店で仕事をし、夜に店を閉めた。今日一日、店長には会わなかった

「ただいまー」

「お帰り、ミラ」

「あれ？お姉ちゃん、帰ってるの？珍しい」

「今日は早く打ち合わせが終わったの」

家に帰ると、姉がいた。いつも仕事でいないから、今日は珍しいなあ

「あ、そうだ！聞きたいことがあるの」

「何、改まって」

「絶対答えてもらうちから！」

私は姉に詰め寄った。ちゃんと聞かなきゃ、信じられないよ！

私は意を決した。聞くからには、私のバイトの話にもなるんだもんね

「お姉ちゃん、歌手以外にも仕事してるでしょ」

「え？」

「怪奇現象を請け負う店、フォルテピアノの言霊使い。だよね？お姉ちゃん」

「……そうだけど。どうしてそれを？」

あっさりだな……

「……フリーゲル、知ってるよね？店長が一緒だもん」

「……ああ……そういうこと……ふうん……」

察しが良いな……我が姉ながら尊敬するよ

「本当に身内が集まったのね。先輩はいとこが、レミは双子の姉妹、店長は一緒に、そして私達。違うのはバイトくんくらいか」

「知ってたんだ。他の人達が身内だって」

「まあね。ミラのことは知らなかったけど」

「私だつてまさかと思ったわよ。言霊使いなんて力、知らなかった」

「要らないわよ、こんな力……」

お姉ちゃん……？

「異端なのよ」

「あ……」

ララと一緒に……力を持つことにより、生じる不都合。羨むことは、彼女らにとって気分の良いものではない

「でもまさか、ミラが呪いをねえ……」

「ララ……うちの魔術士なんだけど、私ララの弟子なの。占い師見習い」

「へえー」

「でも今、いろいろ大変でさ。あ、そうそう。音無律さんって依頼者いたでしょ」

「あー、あの超能力者。オカルト好きで危ない遊びやってる人ね。そっちにも依頼したの？」

オカルト好きで危ない遊び？

「え、うん。まあね。それがさ、その律さんの弟が私と同じ学校で、呪いとかを間違ってる！潰してやる！って考えの人で……」

「絡まれてるのか」

「しかも今度バイトで来ることになって……」

「あの店長のやりそうなことだ」

「やっぱり？」

私達は苦笑しい、食事をすることにした

もうすぐ今日が終わる。私はベッドの上で転がっていた

枕の下から一冊の小さいノートを出す

「今日は、と……」

五藤記符さん、笛さん、琴ちゃん、鼓詩音さん。想いと復讐について……

それから音無姉弟、フォルテピアノの面々と姉

「濃い一日だった……」

これからどうなるんだろうか？

「はあー……」

私はノートを閉じた。枕下へ戻す

「知らん、そんなことは……」

綺麗事も、道徳も、常識も、並べたくなんかない……また、笑みを奪われる

今一人で考えたって仕方ない

私は明かりを消し、目を閉じた

過去と来るべき未来はベストに思える。現在の事柄は最高に悪い  
——シェイクスピア

## 呪いの変化

殺したいほど憎んでいる相手がいますか？復讐したい人がいますか？恨みを晴らしたいですか？

それならば我々にお任せを

怪我をさせることも、不幸にさせることも、殺すことも出来ます。但し、代償を支払う覚悟のある方のみとさせて頂きます

呪い代行人「フリーユージェル」

何をどうしたら、こんなことになるんだろう

「よっ、今日もバイトか？」

放課後、学校の駐輪場。二年生用の自転車置場。カゴにカバンを入れ、門に向かおうかという、まさにその時

音無歌謡くんが目の前に現れた

「そうだけど……」

「そっか」

一体何なの？

「何だよ、その嫌そうな顔」

音無くんと言われたくないっつの

「別に」

「ふーん……ま、いーけど。じゃ、行くか」

「へ？」

「何だよ。どうせ行き先一緒なんだし、早く行こっぜ」

「はぁ……」

連れ立って行くの？

「ほら、何してんだ？行くぞ」

私は胡乱な表情をしながらも、音無くんの自転車の後ろについていった

音無くんに嫌われてると思ってたけど、そうでもないんだ、なんて思いつつ、意外だなーとも思っのだった

「あ」

「ん？あ……」

店に向かう途中の道路上の歩道側に、猫が横たわっていた

首輪も何も付けていない、黒猫。野良猫かな

私は自転車を止め、猫に駆け寄った。通り過ぎる気満々だった音無くんが急ブレーキをかけ、前方で止まった

「おい、何して……」

「あー、やっぱり死んじゃってたか」

遠目からではわからなかったが、近づいてみて予想は溜息に変わった

ここまで身体に破損があれば、まず生きてはいないだろう

「えーっと……あ、あの辺でいいや」

「埋めてやるのか？」

「勿論。ほら、手伝って。あの辺に穴掘ろっ」

近くの適当な草むら。そこに適度な穴を掘る。朝方の雨のおかげで掘りやすいけど、手が汚れちゃうな

「こんなもんか？」

「ん、ありがとう」

冷たくなった小さな黒をそっと持ち上げた。重いようで軽い……

なんて言い様のない気持ちだろう。胸にズシッと落ちてくる

そつと土を被せ、手を合わせた

きつとそのうち、私はこの子を忘れてしまふんだろう。忘却の日々……いつしか当たり前になってしまった、時に追われる日々。余裕もなく、狭くなる視野。思いやれない、気付けない心

あー、なんて……

ツマラナイ

「そろそろ行こっか」

そう声を掛け、私は自転車に向かって歩きだす

「意外な行動するんだな。普通あいうのは、見て見ぬ振りだろ」

「普通って言われても。私は私の普通を実行したんだけど」

「……へー。自分を貫くか。格好良いな」

格好良い？私が？

「何ブーツとしてんだ？早く行こっぜ」

ブーツとなんかしてないよっ

私は半眼になりながらも、自転車に乗り店へ向かった

「ミラちゃん、今日も可愛いわねー！でも、やっぱり服はもう少し可愛くないとー」

「ゴスロリは嫌ですよ、店長」

だから制服の時に言われても

そんな考えは勿論しまつて、私はオフィスのソファに座った

「あら、音無くん。初出勤ね、頑張つてね」

「どうも」

「あれ……どうしたの？二人とも。墓地の近くでも通った？」

「え？」

ふいに、何かに気付いた店長が私達を交互に見ながら表情を曇らせた

何？何なの？墓地って？……ん？もしかして

「さっきの猫？」

「あー、確かに猫みたいね。何か良い事してきたの？」

うわー、この人本当に見えてるんだなー

「野良猫が道路上で死んで……土に埋めてきました」

「そう……ま、そうね。そのままよりは、いいかしら」

どういうことですかねー……いや、深く聞かないでおう

ここは話題を変えて

「依頼は来てますか？」

「今は依頼来てないのよ。どうする？音無くん。雑貨店の方にも入る？」

「ここに座つても暇ですし。入らせて下さい」

何だ依頼無いのか。じゃあ私も雑貨店の方入る

「じゃあそういうことだから、宜しくね、ミラちゃん」

「はい？」

まさか、私に新人指導しろと……！？

「宜しくな、先輩」

あの時と同じ不適な笑み……！ムカつくー

「ほら、行つた行つた」

店長に背中を押され、私は渋々足を進めた

カウンターには暇そうなレド先輩がパソコンに向かって座っていた

お客さんは学校帰りの中学生が三人ほど。うわー、化粧凄い。  
スカート短いなー

「あ、音無くん、こっちも入るんだ？」

私達に気付いた先輩が、こっちを向く。私達は、カウンターに入  
った

「レジ経験あります。宜しくお願いします」

「そうなんだ。宜しく。っても、見ての通り暇なだけだね」

「みたいですね。本業じゃないから、別に構わないってところですか  
？」

「まあな」

何か、あれだけ潰すの何のって言ってた割に、普通だなー、音無  
くん

「先輩がサイトの管理人でしたっけ？」

「ああ。情報収集が得意だ」

「へえー。あのサイト凄いですよね。見やすいし、わかりやすいし、  
でも手が込んで、尚且つ雰囲気が出る」

「ははっ、誉めても何も出ねーぞ」

そんなことを言っていると、お客さんは何も買わずに帰っていった。ま、別にいいけどね

「依頼無いと、暇なんですね」

「それで給料貰えるんだから、意外に良いよな、このバイト」

確かに

「オレ暇なの好きじゃないんですよー」

「ふうん。じゃあ掃除でもする？」

「良いですよ。道具は何処ですか？」

「こつち」

私は立ち上がり、音無くんを案内する。道具や場所などの説明をし、二人で掃除を始めた

普段からやっているのか、音無くんは道具の使い方や掃除方法がちゃんとしている。手際も良いし、素早い。私は意外だと、感心さえした

先輩も同じように思ってるみたい

「音無くん、手慣れてるね」

「そうですか？掃除なんて簡単だと思いますけど」

「要領が良いって言ってるんだよ」

「……ありがとうございます」

あ、音無くんちょっと照れてる

「ミラなんて、全然出来なかったもんな」

「ちよっ……先輩！」

先輩は笑いながら、まあまあと私を宥める。他人事だからって、ネタにしないでよね

「へえー。得意そうなのにな」

よく言われますよ

「ぜんっぜん。料理も掃除もからっきし。まあ掃除は仕事でするようになったから、出来るようになったけど」

「ふーん」

もっとバカにされるかと思ったけど……意外にそんなことしないんだ？

「意外だな」

私も意外です

「でも出来るようになったなら、それで良いじゃん。何も恥ずかしがること無いだろ？」

「そうそう。だから笑い話にしても問題なし」

「いやいや」

「ミラちゃん」

オフィスに繋がる扉が開き、ひょこつと店長が顔を出した

「はい」

「最近、報告書出てないわよー？」

「あ……」

「宜しくねー」

それだけ言うと、店長はオフィスへと引っ込んでしまった

「うあー、かんっぜんに忘れてたー」

「いつから出してないんだ？」

「えーっと……」

私は依頼のメモを見る。報告書を出した分のメモは捨てるから、残っているメモは全部未提出となる。えーっと、一番古いのはーっと

「げ……」

ヤバい、かなりある

「黒打響くんと常盤鍵くんの依頼からです」

「え、何件あるんだ？」

「あはは……」

掃除も終わったし、どうせ暇なんだし、と私は報告書を今書くことにした

「えっと、響くんが骨折依頼をしてきて……」

記憶を掘り起こす。メモがあって良かった

「鍵くんが響くんにやり返して……消失依頼つと」

「やり返し……？やっぱり呪いは連鎖してるじゃねーか」

あ、しまった……音無くん、凄い不機嫌になってる……

「でも、響くんがイジメられてる現状をどうにかしよう……」

「呪いでか？そんなの、骨折させたからってイジメが無くなるわけでもないだろ」

それは私も思ったけど……

「結局、呪い返されて二人して消えちまったんだろ？黒打ってやつは、そんなことになるのを望んだのか？」

「それは……」

そうだけど……

「まあまあ。ミラ、その依頼は書けただろ。次へいこうぜ。終わったことを言っても仕方ないだろ」

先輩の言葉に、私達は口を閉じた。このままじゃ進まないことは、わかっている

私は次のメモを見た

「あ……」

「どうした？」

「えっと……」

私は音無くんを窺うように見た。この依頼は……

「もしかして、弾の依頼か？」

「う、うん……」

弦白弾くん。彼女のストーカーである、声鳴楽の殺害依頼。そして弾くんの友人である音無くんが関わる原因になった依頼

私は黙って、ペンを走らせた

「弾の気持ちはわからなくはないんだ。ただ、呪いを選んだことが理解できない。弾の彼女は、あれから元気ないしな」

無理もない……私だって、彼女のことは気になっていた

だけど、ここで何を言っても言い訳にしかない。だから私は何も言わずに、報告書を書いた

「えっと……次は」

音無くんの嘘の依頼が

「ああ、オレの依頼か。それも書くのか？」

「まあ、一応ね」

黄吹奏さん、この時から出てくるんだよね

「で、次は……」

唱さんの不幸依頼。破棄になると

「律さん……」

音無歌謡くんの姉、音無律さんの依頼。彼氏、黄吹奏さんの事故依頼。超能力があり、不具合が生じた、と

「超能力があるなんて、本当なのか？」

音無くんが半信半疑で聞いてきた

「そんなの今まで一度も見たことないぞ」

「黒魔術があるんだから、あるでしょ。プロが言ったんだし。律さんも知ったのは最近らしいし」

音無くんは不服そうな顔をしている。不本意ながら、納得したみたいだ

「次は……」

五藤記符さん。娘の琴ちゃんを連れ、夫の元同僚、鼓詩音さんを恨み、重度の事故遭遇を依頼。しかし、幻に終わる

「あー、それ踏み切り事故の……。この時は背筋が凍ったな」

「はい……こんな依頼初めてでしたよね」

記符さんは夫が死んだと勘違いをしていた。この直後の、記符さんの夫、笛さんからの依頼で事実が発覚。殺害依頼は破棄になる

「幽霊からの依頼、か……」

どうしてるかな……記符さん、琴ちゃん

「よしっ、書けた！」

「早いなー、もう全部書いたのか」

書く早さは、密かに自慢なんだよね。でも

「手痛いー」

やっぱり力入っちゃうんだよねー

「これ出してきます」

「おう」

立ち上がり、報告書を持ってオフィスへ向かう

店長はソファーに座って電話をしていた

店の電話じゃなくて、ケータイだ……仕事関連じゃないってことかな

「はい、はい……そうですね、わかりました。では明日……はい。それでは」

いつもと違う口調。真面目で、おどけた様子も飄々とした態度も冗談混じりも、欠けらすらない。一体、どんな内容だったのか……相手は誰だったのか……何れにせよ、あの店長がスタイルを崩すなど、滅多にないことだ

「あら、ミラちゃん。どうしたの?」

いつもの店長だ

「あ、報告書を……遅くなってすいませんでした」

「はい、確かに受け取りました。次は気を付けてね」

「はい。じゃあ、雑貨の方に戻ります」

「はいはい。宜しくね」

一礼して、私は雑貨店に戻る。オフィスのドアを閉め、私は息を長く吐いた

いつの間に息を詰めていたんだろ……

「おかえり」

「ただいまです」

先輩の笑顔に出迎えられ、私は知れず笑顔になる。ホッとするな

「どうした、溜息か？らしくない」

「私にだって悩みくらいありますよ」

「学校好きのミラに悩み？もしかして進級出来ないとか？」

「何でそうなるんですか……！」

縁起でもない！そんなこと、ララや店長が言ったら本当に成りかねないし

「ま、ミラのお姉さんに言われないよう気を付けるんだな」

「え？」

「言霊使いだろ。真実になるぜ？いつも言葉に気遣ってないか？」

そういえば、そうかも……？いや、そうかな……？あんまり言葉とか気にしたことないや

でも、もしそうなら大変だよなー

下手なこと言われないように、気を付けよ

「ミラ」

すぐ後ろで扉が開いた。ララが私を探していたらしい

「ああ、来たか……音無の少年」

少年って……音無くんはララより年上に見えるけど？ま、ララは見た目イコール年齢とは言えないからね。でも、音無くんは……やつぱり驚いてるな

「音無くん、ララは私達も知らないこといっぱいある子なの。何者かも、年齢も……でも、私達の仲間だよ。口調はいつもこんなカンジだから気にしないで」

「そつ、か……」

「……何だ、ミラ、我のこと知りたいのか？」

小首を傾げるララ。余計なこと言ったかな？

「え？いや、気にならないと言えば嘘になるけど……でも、知らなくたってララはララだよ」

「そうか……」

あれ？もしかして、照れた？

「師匠、可愛いー」

「……………」

やっぱり同じ人間なんだって、嬉しくなるなー

「師匠？」

「ララは私の占いの師匠なの」

「へえー」

「そういえば、何か用なんだよね」

じゃなきゃ、ララはあの部屋から出てこないし

「ああ……猫が帰らなくてな。ミラが関わったようだから」

「えー、ごめん師匠。今日、黒猫埋めてきた」

「いや、謝罪を求めたわけではない。伝えに来たのだ。猫が感謝している。そうせねば、猫は姿を変え、旅立てぬ」

ララが穏やかに笑ってる……！私良いことしたんだなー

「そっか。ありがとう、師匠」

「うむ。……音無の少年、今良いか？」

今度は音無くんに用事？今日のララはいっぱい喋るんだなー

「ああ、何だ？」

「ミラとレドを責めるは道理ではないぞ。店を作ったは店長であり、呪いを実行するは我の力だ。今暫く待つてほしい。あと少しで我は黒から白へと相成る」

「黒から白……？」

こくりと頷き、それからララは何も話さなかった

ぐるりと部屋を見渡し、店の入り口を見据え、そしてオフィスのある方の壁を見る。そして再び音無くんを見た

「詳細を知りたくば、店長に聞くが良い。我より、理解しやすいはずだ。汝なら、大丈夫だろう」

そう言って、ララはオフィスへと、部屋へと戻っていった

「どういことだ？」

「さあ……」

謎すぎるよー、師匠ー

「今、ララ来てた？」

「来ましたよ」

ガチャツと再び扉が開いた。店長がララの部屋を見ながら問うてくる

「めつずらしー。何？音無くんに用だったの？」

「私と音無くん、とどこですけどね。何だっけ、えと……待つてほしいって、音無くん。黒から白とか何とか」

「そう……」

あ、また真面目な顔

「詳しいことは店長に聞けと言っていました」

音無くんがカウンターから出てきて店長の前に立った

音無くん、聞くつもりなんだ。でも、店長話してくれるのかな？

私でさえ聞いてないことなのに……

「もう少ししたら、ミラちゃんとレドくんにも話そうと思ってたの。ララの力のことについて」

「ララの力……」

「今日はもう、こっち閉めちゃいませよ。戸締まりしたら、オフィスに集合ね。じゃ、先行ってるから。宜しくー」

いつもの明るさでそう言って、店長は一人、先にオフィスへと姿を消した

「じゃ、戸締まりするか。ミラ、ほい、鍵」

先輩に鍵を投げ渡され、私は入り口のドアに向かう。表のOPENと書かれた札をひっくり返し、CLOSEに。中に入り鍵を二つ掛け、窓を閉めて先輩のもとに戻った

「鍵オツケーです」

「ん、こっちもオツケーだ。じゃ、電気消すぞ」

音無くんと先にオフィスへ入る。先輩が電気を消して後を追ってきた。これで戸締まりはオツケーっ

「店長、戸締まりオツケーです」

「はいはい、ありがとー。じゃ、早速。皆座って座ってー」

オフィスのソファーに私と音無くん、向かい側に店長と先輩が座った

「ララは部屋の中、かな」

「ララの力の存在云々は、説明してもややこしいだけだし、あるものだと思うってくれたら良いと思うの。それは、良いかしら？」

私達は皆、頷いた

「うん、それはオツケーね。じゃあ、黒と白の話に入るわね。今、ララは黒魔法しか使えないの」

黒と白って、黒魔法と白魔法のことだったのか。呪いは黒魔法だもんな。でも、白になるってのは一体……

「呪う力。不幸にする力。それが黒い力。ララは、いろいろあつて、白い魔法を忘れてしまったの。昔は使えていた優しい白い魔法を、いつしか忘れてしまった。でも、また思い出しかけている。黒い力を使いながらも、不幸にさせない魔法を使えば、ララはまた、幸せな魔法が使えるようになる」

「黒魔法なのに、不幸にならない魔法？」

「そう……ミラちゃんと、音無くんが教えてくれた……導いてくれたの。魔法のあり方を」

「私と……」

「オレが？」

私と音無くんは、二人して顔を見合わせた。私達、何かしたっけ？

「ミラちゃんは、ずっと一人だったララを師匠と仰ぎ、魔法も呪いも否定せずに傍にいてくれた。あんな変わった子なのにも関わらず」

私は何だか照れくさくなった。私にとっては、普通の、当たり前  
の行動だったのだから

「そして、小さな疑問を持っていた」

ハツとした。店長には、わかっていたんだ

「そうでしょ？ミラちゃん。呪いの必要性について、疑問を抱き始めていた。だけど、いつも考えるのを途中でやめた」

「……はい」

ああ、この人は……本当に

本物なんだ

「そして、真っ向から反対する音無くんが現れた。それが、ミラちゃんの思考への鍵となった」

「そうですね。音無くんが来てから、考えるということを考えるようになった」

思考への戸惑い。音無くんの掲げる信念への後ろめたさ。ララの言葉。店長の思惑。呪いへの哲学

逃避は楽だった……だけど

「音無くんの意見は、私のもやもやしてた気持ちを言葉にしてくれた。カタチにしてくれたんです」

「そうね……。二人は、フリーゲルに変化をくれた。元々、呪いを扱うにしても、不幸な人を増やしたいなんて思ってた……でも、慣れてしまった。初心を忘れてしまったの……依頼なら何でも受けるようになってしまった。気付かないうちに……」

「店長……」

「でも貴方達が変わってくれたのよ。気付かせてくれたの。音無くんが乗り込んできたあの時、私は思い出した。目的を……十年前の目的を、思い出したの」

十年、前……？

「音無くん、貴方がララの前に現れることは、十年前からわかっていました。その時から私は貴方を待っていたの」

「十年って……わかってたって……」

「夢で未来を見た……十年前に、今の夢を。それには、ミラちゃんの協力が必要だった」

「私？」

「そう……ミラちゃんが音無くんを店に連れてくるかは二十五パーセント。連れてこないかもしれない。出会わなかったかもしれない。私には……私は貴方に賭けたの。ララの……フリーゲルの未来」

を」

もう言葉も出ない。何が何だか、わからなくなってきた

「音無くん、だからもう少し待ってほしいの。ララが白魔法を使えば、呪いたい気持ちを、貴方の言う他の気持ちに昇華出来る。あの子は、その手伝いが出来るようになるの」

「本当に……？」

「ええ。音無くんが考えることをやめなかったから、ミラちゃんに向き合ってくれたから、レドくんが見守ってくれたから、だから、もう大丈夫。皆、ありがとう。心素直に、一生懸命にいてくれて……そして諦めないでくれて、ありがとう」

今の気持ちを言葉にすることが出来ない。語彙が少ないとか、そんなことよりも、そう……言葉にしくても良いじゃないか。そんな気持ちがあつたって、良い。全てを言葉に出来るとも、思わない「わかりました。これからどうなるか、見させてもらいます。その結果がもし、オレの許せないものだったら、その時は今度こそ宣言通り、フリーゲルを潰します」

真っ直ぐに店長を見る音無くん。今まで見た中で一番の、輝いた芯のある格好良い顔だ

「頼もしいわね」

楽しそうな店長の顔。何だか安心したみたい

「それじゃあ、そういうことだから、明日からも宜しくね」

「はい」

私達は皆、異口同音に返事し、今日はもう家に帰った

もうすぐ今日が終わる。私はベッドの上で転がっていた

枕の下から一冊の小さいノートを出す

「今日は、と……」

音無くん初出勤。黒猫。依頼なし。ララの力について……

私はペンを止めた。魔法のことはよくわからないけど、十年って  
凄いな……あんな風に感謝されるのも、何か変なカンジだし

「上手くいくといいな。頑張れー師匠」

ありのままの私が必要ななら、私に何か出来るなら、手伝うよ、ララ

「よしっ」

私はノートを閉じた。枕下へ戻す

綺麗事だろうが何だろうが、そんなの関係ない。私は私に嘘を吐きたくない。したいようにするの。それが例え辛くても……音無くんのように、自分の意志を持って行動したいから。もう楽な道を選

ばない

ただ、ちょっと気になることがある

「何だか上手くいきすぎてるな」

考えすぎだろうか……

私は明かりを消し、目を閉じた

生きるとは呼吸することではない。行動することだ——ルソー

## 呪い幸福歌

殺したいほど憎んでいる相手がいますか？復讐したい人がいますか？恨みを晴らしたいですか？

それならば我々にお任せを

怪我をさせることも、不幸にさせることも、殺すことも出来ます。但し、代償を支払う覚悟のある方のみとさせて頂きます

呪い代行人「フリーユージェル」

何だかいろんなことが急展開すぎて、ただ今混乱中です

「お姉ちゃん、あれ本当なの？」

「あれって？」

とぼけるとこじゃないよ、もう！

「歌手活動よ！休止ってどういうこと？！」

「どうって、そのままの意味」

あっさりしている姉の態度に、私は文句が次から次へと溢れてくるのを、溜息に変えた

「何で……急に」

それは、ある日突然のことだった。私はテレビ画面に表示された文字に、我が目を疑った

「テレビ見てびっくりしたんだから！突然歌手辞めるなんて、どういうこと？あんなに人気あるのに、どうして？」

「まあまあ。落ち着いて落ち着いて」

「それに、あの曲の歌詞何？今までと全然違うじゃない」

アルトこと姉が歌手として最後に出した新曲は、今までの作風とは全く違うものだった。それだけでも大変な騒ぎだというのに、それに加えて歌手活動を休止すると発表があったのだ。再開は予定されていないが、小説家になるという話もあり、近々出版の予定があるとも報道されていた

「前から決めてたの。この力を活用できて、私の最終目標を達成する方法として、ね」

「最終目標って、前言ってた世界平和？」

「そ。じゃ、今度出すベストアルバムの打ち合わせあるから、行ってくる」

行ってしまった……

「何だよ、楽しそうじゃん」

心配したんだぞ。人気の反面、結構叩かれてたから……トラブったのかも、とか、辞めさせられたのかも、とか、いろいろ心配したのに、全然そんなことないみたいだし。何か損した気分

「お姉ちゃんのばーか」

私は誰もいないドアに向かって、呟いた

「ミラちゃん、今日も可愛いわねー！でもー、やっぱり服はもう少し可愛くないとー」

「ゴスロリは嫌ですよ、店長」

今日は土曜日。朝から姉に詰め寄って、気分は良いとは言えない

「どうしたの？今日は溜息が多いじゃない。あ、わかった！音無くんがまだ来てないからでしょー」

「何でそうなるんですか。違いますよ」

「えー違うの？」

そのつままないって顔やめて下さい

「違います。姉のことですよ。私、何も聞かされてなかったから…

…」

「あー、あれねー。私達もびっくり。あの曲なんかまた、凄いわよ

ねー」

「曲……」

私は歌詞を思い出していた

——法で縛られた世界

偽りの自由で出来た羽根を自慢げに広げる愚か者

口先だけの偽善者

不幸な主人公気取りの利己主義者

知識を駆使して己の利益を追求する者

騙され、行くあてのない放浪者

見てみぬふりをする、自己愛者

十人十色とはよく言ったもの

様々な、人間の形をした醜い彼らは今日も生きている

誰が消えて誰が増えようが、気付かない

己と大切な人だけを守りながら、知らず知らず罪を重ねていく

汚したつもりはないのに、いつの間にか汚れていく手のひら

自分達人間が世界の頂点に立ち、全てを知ったかのような傲慢さ

この世界は複雑で、生きにくい

普通に、笑って生きたいだけなのに――

「何つー歌詞だ……全く……」

我が姉ながら、理解不能だ

「さ、ミラちゃん。今日も元気に頑張りましょう」

「はい」

店長の言葉に思考を中断させ、私は仕事を始める。依頼がないという事だったので、私は雑貨のカウンターに入ることにした

「よ、ミラ」

「先輩、早いですね」

「今日はアラムより先に起きたからな」

楽しそうに笑う先輩。あー、悩みなんて吹っ飛びそうだよ

「ミラ、アルトのファンだっけ？」

「え、ああ……はい」

先輩には内緒にしてるんだっただな……言ったらダメなのかな、や

っぱり

「歌手引退だろ？急に何でだろうな。病気が何かかな？ミラは、どう思う？」

「え、あー……どうなんですかねー？」

私が知りたいですよ、先輩

「ベストアルバム出るんだろ？オレ買おうかなー」

「CDはいつも借りてる先輩が？」

あんまり買わないのに、珍しい

「歌詞良いしさ、結構好きなんだよな。曲も良いのばっかだし。ミラも買うだろ？」

「へ？あ、ああ、そうですね」

「にしても、この前出たシングル、凄いやな」

「何か、アルトラしくないですよね、歌詞も歌い方も」

「そうか？オレは好きだな。何か、あれがアルトが本当に歌いたい歌なんじゃないかって思う」

「本当に歌いたい歌？」

「そんな気がただけだよ」

本当に歌いたい歌、か……お姉ちゃんが本当にしたい事って何なんだろう？

そんな事を考えながら、私はボーツとカウンターから店内を眺めていた

「そういえば、今日音無くんは？」

「何か用事があるらしくて、遅れるって言っていましたよ」

「ふーん。寂しい？」

「……………はい？」

何ですと？

「音無くんと仲良いみたいだからさ。好きなのか？音無くんのこと」

にやにやと楽しそうに聞いてくる先輩。思わずムツとした

「好きなわけじゃないですか。学校では教室に乗り込んでくるし、すぐ怒って突っ掛かってくるし、初対面の私に向かって、よく呪いの店でバイトなんかするなーとか言ってきたんですよ？」

「ふーん。嫌いとは言わないんだな」

「え？」

「それに、この前の店長の話を聞いてから、今ミラが上げた不満は

解消されたんじゃないのか？」

「そ、それは……」

そうだけど……

「あ、噂をすれば」

「どうも」

扉が開き、音無くんが入ってきた。先輩にあんなこと言われたからか、何か意識しちゃうよ

「あ、ミラ、依頼だ」

お、凄いタイミング。何だか久し振りだな

「んーと？」

先輩はキーボードを叩く。幽霊事件があってから、先輩は出来るだけ詳細なデータを出すようになった

「ん、問題なし。データ送るぞ」

ポケットでケータイが震える。私はデータが来たことを確認し、オフィスへ向かった

後から音無くんもついてくる

「店長、依頼来たんで行つてきます」

「はいはい。気を付けてね。あら、音無くん来てたの？じゃあ二人で行ってきてくれる？」

「え？」

「あら？え？って何かしら？ミラちゃん」

「……………何でもないです。行ってきます」

逆らっちゃいけない目だ……

「宜しくねー」

私は音無くんと一緒に、店を出た

「待ち合わせ場所は公園。名前は譜号旋<sup>ふこうせん</sup>さん、高校三年生。姉の消失依頼。理由は彼氏を取られたから……………だつてさ」

公園に向かいながらデータを読む。と、音無くんは半眼になっていた

「それは姉のせいなのか？」

「それは聞いてみなきゃわからないけど……………えっと、この辺かな？」

待ち合わせ場所に着き、周りをきよろきよろと見渡す。が、風が冷たい今日の公園には、誰もいなかった。まだ来てないのかな？

あー、手冷たー。手袋忘れちゃったもんなー

「ほら」

「え？」

両手を暖めるように擦っていると、音無くんの手を包まれた

暖かい……って、ええ？！

「うわ、冷たいなー」

言いながら手を握られた。ちよっ、何これ！

心臓が耳の傍にあるみたいに、煩く鼓動が聞こえる。顔、熱い……

何で？私が好きなのは、先輩でしょ？！音無くんのことなんか……

「あの……」

「へ？」

声を掛けられ、びっくりして変な声が出た。慌てて手を離し振り向くと、可愛い女性が立っていた

「もしかして、フリーゲルの……」

「はい。貴方が依頼者の旋さん？」

「そうです」

年上に見えないなー。背も低くて可愛いー

「早速ですけど、依頼の確認を……姉、弓<sup>ゆみ</sup>さんの消失依頼。理由は彼氏を取られたから。オッケーですね？」

「はい」

「それじゃあ宣誓「詳しく聞いても良いですか？」

宣誓に入ろうとした私を制して、音無くんが質問をした

うあー、何すんだよー

「彼氏を取られたからって、それはお姉さんのせいなんですか？」

「今回が初めてじゃないの。皆、お姉ちゃんのこと好きになっちゃうの。お姉ちゃんとは会わせないようにしてるのに、お姉ちゃんが面白がつてわざと彼氏と会おうとするし……これじゃあ私、誰とも付き合えないよ！」

お姉さん、美人なのかなー？ま、それはちょっと可哀想な気もするけどねー

「音無くん、宣誓に入っても良いかな？」

もう邪魔されたくないしね

「宣誓で気持ち変わるかもだし」

「……そうだな、わかった」

ちよつと渋つてたけど、頷いてくれた。これでさつきみたいなの  
とには、ならないもんね

「じゃあ宣誓を」

「え？」

私は仕事モードに入った。空気が変わる

「宣誓して下さい……同等の代償を払い、呪いが帰り、身を滅ぼそ  
うとも、構わないと。人を呪わば穴二つ……わかりますよね？」

「代償って……？」

「同等のものを差し出してもらいます。消失依頼なら、貴方にも消  
えてもらいます」

「え……」

「どうします？」

旋さんの場合、自分が消えたら意味ないもんね。さ、どうするか  
な？

「そんな……そんなの、意味ないよ」

「人一人消そうとしてるのに、自分だけ幸せになんてなれないんで  
すよ」

音無くん……

「努力はしたんですか？お姉さんとちゃんと話し合っただんですか？」

「そ、それは……」

「それに、そんなことでお姉さんを選ぶなんて、そんな男だったら別れた方が良くいですよ。きっといつか、旋さんだけを見てくれる人が見つかります」

良いこと言うじゃん

「……………ちょっと、考えてみます」

そう言って頭を下げた旋さんは、踵を返して行ってしまった

「依頼破棄、と」

「戻るか」

「うん」

私は音無くんと一緒に店へと戻った

「お帰り、ミラちゃん。依頼破棄になったの？」

「はい」

店のオフィスのソファー。音無くと並んで座り、店長に報告する

「そう。音無くんのおかげかしら？」

クスクス笑いながら言う店長。わかってて聞くなっつの

「変わらないものは無いわ。この世に永遠は存在しないの。だからこそ、変わるなら良い変化をしたいわね」

「出来ますか？この店も、良い変化が」

音無くんの質問に、店長は不遜に笑った

「出来る出来ないじゃないわ。するのよ」

うわ、格好良い。でも、店長らしいや

「さっすが店長。格好良いー」

「ふふん。もつと言ってー」

お調子者なんだから

思わず零れた笑みに、雰囲気も明るくなる

と、ケータイの着信音が聞こえてきた

「はい」

あ、店長のケータイだったんだ。でも、どうしたんだろ？顔つき

が真剣になっただけ……この雰囲気、確か前に……

「はい、そうです。わかりました。それでは明日」

前にも気になった、店長がスタイルを崩す電話

電話を切った店長は、溜息を吐いた

「店長の溜息、初めて見ました」

「私だって、溜息くらい出るわよ」

「でも、店長……」

「さ、仕事仕事。ミラちゃんも音無くんも、雑貨の方宜しくね。今日は割引デーだから、お客様いつもより多いわよ」

「……はい」

私は雑貨店の方へ向かう。店内には、高校生くらいの女の子達やカップルが数組と、いつもより確かにお客さんは多かった

「ただいまです、先輩」

「お帰り。それ、包んでくれるか？」

「はい」

先輩一人じゃちょっとキツいな。レジ並んでるし

「すみません、これなんですけど」

「はい」

久々の混み具合に、暫く私達三人は休みなく動き回った

「はぁー」

「やっと一息つけたな」

月一の割引デーと休日が重なった今日は、いつもより特に忙しい。依頼がなくて良かった

「そういえば、さっきの依頼は？破棄になったのか？」

「はい」

「そっか」

「そういえば……先輩、店長の溜息って見たことあります？」

「何だそれ」

「さっき初めて見たんです。真剣な顔で、いつもと違う雰囲気……電話してた時なんですけどね」

「んー……店長が真面目になるのは、そうだな……実家の人とかかな」

実家ってーと、確か……神社？

「厳しいカンジですか？店長の実家」

「さあ、オレはこれ以上は知らないから」

まあ、それはそうか

「本人に聞いたらどうだ？」

「だって店長絶対教えてくれなさそう」

「じゃあ、ララに聞くとか」

「あー、そっか」

親戚なんかもんね

「さ、ミラ。今のうちに休憩行ってこい」

「良いんですか？やったあ。じゃあお願いします」

「音無くんも休憩入って良いよ」

「これだけ片付けてからにします」

「じゃ、お先です」

私はオフィスへ向かう。と、ララがソファーに座っていた。店長  
はいないのかな？

「師匠、何してんの？」

「来たか。いや、そろそろミラが昼食を摂る頃合いだと思つてな」

「待つてくれたんだ。じゃ、お弁当持つてくるね。お茶で良い？」

「ああ」

私は用意をしながら、きよろきよろと部屋を見渡した

「店長は？」

「先程出掛けた。すぐ戻ると言っていたぞ」

雑貨の方には来てないから、オフィスの裏口から出たんだ……あまり使わないのに珍しい

「あのさ、師匠」

「何だ？」

私はララの隣に座った

「店長が溜息を吐いたり、真剣な顔になる電話の相手って知ってる？」

「……実家、親戚辺りの人間だろう。恐らく我の母だ」

「師匠の？」

「ああ。我らは異端の双子ゆえ、家には居られぬことがあってな…  
…店長に連れ出してもらったのだ。以来、我ら姉妹は別々。我の力が  
落ちて着くまでは家には帰れぬ」

「そう、なんだ」

師匠も、大変なんだな

「大丈夫だ。気に病むことはない。もうすぐ我の力は安定するのだ  
からな」

「うん」

「それに、あれが真剣になるのは緊張のためだ。我が母は、本家の  
当主であるからな。あれは分家の人間だ」

あれって……店長のこと？

「気は済んだか？」

「へ？あ、うん。ありがとう」

心配する必要は無いんだよね

「いっただっきまーす」

スッキリした私はご飯を食べ始めた

「ミラの方は、どうなのだ？家は変わらずか？」

「……………うん。いつもいつも、家の前で確認するよ。ここは私の家なのかなって」

「そうか……………ま、そういう時期なのだろう。悩み、考え、戸惑う。きつといつかは、笑い話になる」

「そう、かな……………」

「そうだ」

本当、大人みたい

「師匠が言うなら、そうだよね。うん、ありがとう」

「ああ」

ガチャッとドアが開き、音無くんが休憩しにオフィスに現れた

「ん、お先です」

「ああ」

隣にはララが座っているため、自然向かいに座る音無くん

うー、何か意識しちゃうなあ

音無くん、顔良いし結構優しいし……………悪くはないんだよねー

出会いが最悪だったけどね

「何だ？オレの顔何かついてるか？」

「あ、いや、別に」

うわ、じっと見ちゃってた

「見惚れたか？好意を持っているのだろう？」

ちよっ、ララ？！

「な、何言ってるんの師匠？！」

こ、声の上擦ったー

「素直だな」

「え？」

ら、ララー！

って、音無くんも目逸らさないでよ。顔を赤くするなー！

「やつ、違っ、違っから！」

「ミラ、その否定ではちよっど……」

「もう、何言いだすのよ師匠は！」

「ならば、引っ込むとするか」

そう言ってララは奥の部屋に戻ってしまった。楽しそうに笑いながら

こんな状態で二人きりにされても……居たたまれないっつの！

「わ、私も戻るよ。先輩と交代しなきゃ」

「あ、ああ」

お弁当を片付け、お茶を一気飲みする。急いで雑貨の方へ戻った

「あれ、もう戻ったのか？何か顔赤いぞ。熱でもあるのか？」

「な、何でもないですよ。大丈夫です。さ、先輩、休憩どうぞ」

「そうか？じゃ、宜しくな」

先輩を見送り、カウンターに入る。お昼時だから、お客さんは一人二人つてとこか

にしても……私は大きな溜息を吐いた

「何よ皆して音無くん音無くんって」

私が好きなのは……好き、なのは……？

私が本当に好きなのは、誰？

自分の気持ちなのに、ふと分からなくなる時がある。自分にしか、わからないはずなのに……

「はあー」

私はもう一度溜息を吐いて、窓から見える雲のない空を見つめた

「ただいまーって、誰もいないのか」

家に帰ると、誰もいなかった。電気やヒーターのスイッチを入れる

上着を脱いで、自分の部屋へ向かった

「うー、寒う」

カバンを置いて、上着を掛ける。ふと床に目がいった

姉とは同室。机は、本棚を間に挟んで並んでいる。その本棚の前の床に、紙が落ちていた

「紙？原稿用紙だ……何か書いてある。あ、これ出すって言うってた小説の？」

姉の手書きの原稿用紙。これは小説の序章部分みたいだ

「これ……詩？あの曲の詞に似てる……」

——夢を忘れた街

生きる意味を探し、迷い悩む愚か者

嘘を並べる偽善者

他人を同情する自分に酔う利己主義者

知恵を働かせ、言葉巧みに己の利益を追求する者

騙され、人を憎み呪う放浪者

関係ないと思いつ込む、自己愛者

人それぞれとはよく言ったもの

様々な、人間の形をした醜い彼らは今日もそこにいる

誰が笑い、誰が泣こうが、気付かない

己と大切な人だけを守りながら、知らず知らず誰かを傷つけていく

生きている限り、汚れていく手のひら

自分達人間が全ての頂点に立ち、世界を知ったかのような傲慢さ

この世界は混沌し、生きにくい

普通に、楽しく生きたいだけなのに――

「これが本の冒頭？何考えてんの？お姉ちゃん」

姉の机に置こうとして、もう一枚原稿用紙があるのに気付いた。

端に終章と書いてある

「これ……」

——夢を輝かせる街

死なない工夫を考え、明るく生きる賢者

真実を貫く強い心

他人を思いやれる、心遣い

知恵を働かせ、皆のために動ける者

人を信じられる本当の強さ

関係ないと思わず、心を砕く者

人それぞれで、素晴らしい

様々な個性を持った彼らは、今日もここにいる

皆で笑い、皆で泣き、皆で願う幸福

世界の平和は、夢ではない

生きることは、行動することだ

自分達人間は全てを知らないが、世界を思ふことは出来る

この世界は未来へ向かい、歩きだした

普通に、楽しく生きられるように――

「似てるけど、違う……綺麗事みたい」

だけど、好きかもしれない。本当にそんな世界になれば……

「いいな」

私は姉の机の上に、原稿用紙を置いた。ヒーターのスイッチを入れたままのリビングに向かう

「がんば、お姉ちゃん」

テレビのスイッチを入れる。と、姉の歌声が聞こえてきた

アルトの特集番組らしい。私はその歌を聞きながら、目を閉じた

もうすぐ今日が終わる。私はベッドの上で転がっていた

枕の下から一冊の小さいノートを出す

「今日は、と……」

譜号旋さん、依頼破棄。ララのお母さんとの話。音無くん……

私はペンを止めた。顔が熱い

「っ……もう……」

皆して、音無くん音無くんって本当にもう……！

「はぁー……」

私はノートを閉じた。枕下へ戻す

「何よ、ばーか」

誰がバカなんだか

「私も何か始めようかなー」

姉みたいに歌は上手くないし、小説も書けないけど……

「何か、探そう」

私は明かりを消し、目を閉じた

どこかから聞こえる澄んだ音色

心地よくて、綺麗な旋律。奏でるは、どんな心を持った人？

歌うように流れるメロディーは風に乗り、世界へ旅に出る

フリーゲルの音色に、その思いを乗せて

幸せになりたいですか？幸せを知りたいですか？幸せになってほしい人がいますか？

それならば我々にお任せを

憎悪も怨恨も昇華させて、幸せになるお手伝いをさせて頂きます

幸福招来人「フリーユージェル」

過去より、今を見据えて勝利を勝ち取り、未来へ進め——來澄和樹

END

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6591k/>

---

フリューゲル

2010年10月8日23時19分発行